

# 序

福岡県教育委員会では、主要地方道苅田採銅所線の改良事業に係り、京都郡苅田町法正寺に所在する法正寺遺跡群第2次と、同町山口に所在する山口古墳群の発掘調査を実施しました。本書はその成果をまとめたものです。

苅田町は西にカルスト地形で知られる平尾台を負い、東には周防灘に面して瀬戸内海へと開けており、起伏豊かな自然環境に彩られ、交通の要としても知られています。古代においては九州と畿内とを結ぶ要地として重要な役割を担い、石塚山古墳や御所山古墳といった九州を代表する前方後円墳が築かれました。戦国時代には松山城が豊前の覇権争いの要地となり、また、こんにちでは町内の苅田港や北九州空港を通して国内外へと門戸を開いています。

今回ここに報告する二遺跡の発掘調査では、弥生時代の生活跡や古墳時代の墳墓群が見つかり、当時の人たちの暮らしや葬送の様子を知る上でたいへん貴重な成果を得ることができました。本報告書が教育、学術研究とともに、文化財保護や地域活性化の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査から報告書作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力、ご助言を賜りました。ここに厚く感謝申し上げます。

令和5年3月31日

九州歴史資料館

館長 城戸 秀明

## 例 言

1. 本書は、主要地方道苅田採銅所線の改良事業に伴い平成18年度に福岡県教育委員会が実施した、法正寺（ほうしょうじ）遺跡群第2次調査と、平成22・23・26年度に福岡県教育委員会が実施した、山口（やまぐち）古墳群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

各調査区の調査期間および調査担当者は次のとおりである。

法正寺遺跡群第2次	平成18年10月5日～平成18年10月23日	吉田 東明
山口古墳群	平成22年12月24日～平成23年3月31日	吉田 東明
	平成23年5月17日～平成23年9月8日	城門 義廣
	平成26年9月22日～平成26年10月16日	城門 義廣

2. 発掘調査および報告書作成は、福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は吉田が行った。空中写真撮影はアジア航測株式会社に委託した。

4. 本書に掲載した遺構図の作成は調査担当者の他、海出淳平が行った。山口古墳群の地形測量図作成はアジア航測株式会社に委託した。

5. 出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者および九州歴史資料館で行った。

6. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7. 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「苅田」を改変したものである。本書で使用する座標は、世界測地系による座標を使用し方位は座標北を使用する。

8. 本書の執筆は、法正寺遺跡群第2次を吉田が、山口古墳群を城門が担当し、編集は吉田が行った。

## 目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経緯	1
1)	法正寺遺跡群第2次	1
2)	山口古墳群	1
2	調査・整理の組織	2
II	位置と環境	5
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	法正寺遺跡群第2次発掘調査の記録	7
1	発掘調査の内容	7
1)	遺跡の概要	7
2)	遺構と遺物	7
3)	小結	15
IV	山口古墳群発掘調査の記録	17
1	発掘調査の内容	17
1)	遺跡の概要	17
2)	遺構と遺物	18
3)	小結	46
V	おわりに	48

## 図版目次

図版1	1	法正寺遺跡群から北東を望む
	2	法正寺遺跡群第2次調査区 I区全景(南から)
	3	法正寺遺跡群第2次調査区 II区全景(南から)
図版2	1	1号土坑遺物出土状態(東から)
	2	1号土坑(東から)
	3	2号土坑(北から)
図版3		法正寺遺跡群第2次調査出土遺物
図版4	1	山口古墳群から東を望む
	2	山口古墳群全景(南から)
図版5	1	11号墳現況(南から)
	2	11号墳西トレンチ(南西から)

- 3 11号墳東トレンチ (南東から)
- 図版6 1 11号墳玄室奥壁 (南から)  
2 11号墳玄室左側壁 (南東から)  
3 11号墳玄室右側壁 (南西から)
- 図版7 1 12号墳現況 (南から)  
2 12号墳南トレンチ (南西から)  
3 12号墳玄室奥壁 (南から)
- 図版8 1 12号墳玄室左側壁 (南東から)  
2 12号墳前門部 (南から)  
3 12号墳閉塞 (南から)
- 図版9 1 13号墳全景 (南から)  
2 13号墳玄室奥壁 (南から)  
3 13号墳玄室右側壁 (南西から)
- 図版10 1 13号墳前室左側壁 (南東から)  
2 13号墳前室右側壁 (南西から)  
3 13号墳羨道左側壁 (南東から)
- 図版11 1 14号墳全景 (南から)  
2 14号墳玄室 (南から)  
3 14号墳閉塞 (南から)
- 図版12 1 15号墳全景 (南から)  
2 15号墳玄室 (南から)  
3 15号墳閉塞 (南から)
- 図版13 1 17号墳東トレンチ (東から)  
2 17号墳北トレンチ (西から)  
3 17号墳全景 (南から)
- 図版14 1 17号墳遺物出土状態 (南東から)  
2 炭窯現況 (南東から)  
3 炭窯全景 (南東から)
- 図版15 11・12号墳出土土器・鉄器
- 図版16 12・13・14号墳出土土器
- 図版17 14・15・17号墳出土土器

## 挿 図 目 次

第1図	福岡県苅田町の位置	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	法正寺遺跡群第2次調査位置図 (1/1,000)	7
第4図	法正寺遺跡群第2次調査 I区遺構配置図 (1/100)	8
第5図	法正寺遺跡群第2次調査 II区遺構配置図 (1/100)	9

第6図	1・2号土坑実測図 (1/30)	10
第7図	法正寺遺跡群第2次調査出土土器実測図 (1/4、1/3)	12
第8図	法正寺遺跡群第2次調査出土石製品・土製品・金属製品実測図 (2/3、1/2)	14
第9図	山口古墳群地形測量図 (1/300)	16
第10図	山口古墳群調査区位置図 (1/1,000)	17
第11図	11号墳地形測量図 (1/150)	18
第12図	11号墳墳丘・墳丘内列石実測図 (1/80、1/60)	19
第13図	11号墳主体部実測図① (1/60)	20
第14図	11号墳主体部実測図② (1/60)	21
第15図	11号墳出土土器実測図① (1/3)	23
第16図	11号墳出土土器実測図② (1/3)	24
第17図	11号墳出土鉄器実測図 (1/2)	24
第18図	12号墳地形測量図 (1/100)	25
第19図	12号墳墳丘実測図 (1/80)	26
第20図	12号墳主体部・閉塞実測図① (1/60)	27
第21図	12号墳主体部実測図② (1/60)	28
第22図	12号墳出土土器実測図 (1/3)	29
第23図	13号墳地形測量図 (1/150)	31
第24図	13号墳墳丘実測図 (1/80)	32
第25図	13号墳主体部実測図① (1/60)	33
第26図	13号墳主体部実測図② (1/60)	34
第27図	13号墳出土土器実測図 (1/3)	35
第28図	14号墳地形測量図 (1/100)	36
第29図	14・15号墳墳丘実測図 (1/80)	37
第30図	14号墳主体部・閉塞実測図 (1/60)	38
第31図	14号墳出土土器実測図 (1/3)	39
第32図	15号墳地形測量図 (1/100)	40
第33図	15号墳主体部・閉塞実測図 (1/60)	41
第34図	15号墳出土土器実測図 (1/3)	42
第35図	17号墳地形測量図 (1/100)	43
第36図	17号墳墳丘・主体部実測図 (1/80、1/60)	44
第37図	17号墳出土土器実測図 (1/3)	44
第38図	炭窯実測図 (1/60)	45



# I はじめに

## 1 調査にいたる経緯

福岡県道 64 号苅田採銅所線は、福岡県京都郡苅田町から同県田川郡香春町に至る県道（主要地方道）である。この道路には狭隘区間が複数あり、事業担当である福岡県行橋土木事務所（当時、現京築県土整備事務所）では計画的にこの路線の拡幅工事を進めている。

### 1) 法正寺遺跡群第 2 次

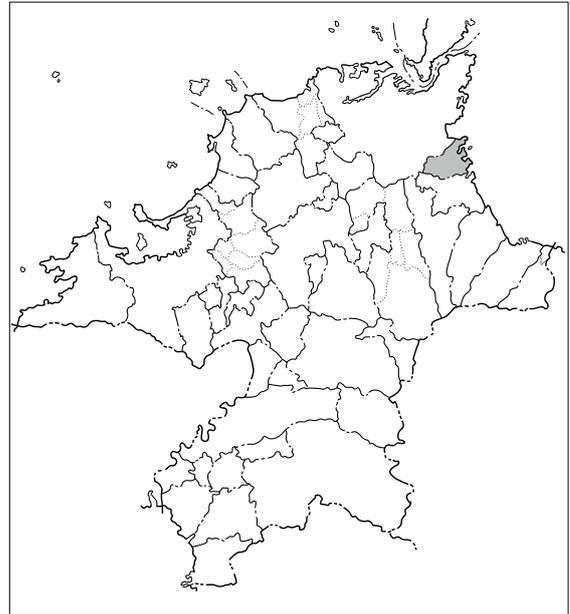
平成 18 年度に計画された苅田町法正寺地区の道路拡幅工事については、周知の埋蔵文化財包蔵地「法正寺遺跡群」の範囲内であったため、行橋土木事務所と調整の上、平成 18 年 9 月 15 日に道路拡幅施工予定地内、および採土施工予定地内の確認調査を実施した。その結果、両地内にて遺構・遺物を確認したため、施工前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査地番は、苅田町大字法正寺 352-1 番地と、同 372 番地である。遺跡名については苅田町教育委員会と協議の上、「法正寺遺跡群第 2 次調査」と称することとした。

二ヶ所に分かれた調査区については、便宜上 352-1 番地をⅠ区、372 番地をⅡ区と呼称し、平成 18 年 10 月 5 日に重機を搬入してⅠ区より表土掘削を開始した。同月 10 日にはⅡ区の表土掘削を開始、同日中に作業員を投入してⅠ区の遺構確認作業を開始した。Ⅰ区の遺構掘削作業は 16 日までにほぼ終了し、17 日にはⅠ区の遺構図化作業とともにⅡ区の遺構確認・掘削作業を併行して進めた。20 日にはⅡ区の遺構掘削作業をほぼ終了、10 月 23 日にはⅡ区の図化作業を完了し、遺跡全体の清掃作業の後に写真撮影を行い、機材を撤収して発掘調査を完了した。

### 2) 山口古墳群

山口古墳群も周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたため、工事に際して事前に協議を実施し、施工範囲については本発掘調査の実施が必要である旨、通知を行った。

山口古墳群は低地との比高差があり、丘陵上が狭小であることや、直下に民家が位置していることなどから、用地買収後の平成 22 年度に先行して樹木伐採と地形測量を実施し、安全対策を講じることとなった。発掘調査は平成 23 年度に実施を計画し、事前の平成 22 年 12 月 24 日～平成 23 年 3 月 31 日の期間で地形測量図の作成を委託事業により実施した。その後、翌平成 23 年 5 月から



第 1 図 福岡県苅田町の位置



法正寺遺跡群の試掘調査

本発掘調査を開始することとなった。調査地の地番は、福岡県京都郡苅田町大字山口 1550、1551、1552-3、1556-2、1557-2 番地である。

本発掘調査に際しては、重機等の進入が困難であることから、建機のみを丘陵下に設置し、5月17日より人力による掘削を開始した。廃土捨て場がほとんど確保できなかったことから、竹を使って柵を築き、土嚢袋に入れた廃土を重ねていった。地表面に露出した巨石の位置などから、当初は古墳が6基あるものと考えていたが、調査の進展に従い、「16号」と番号を付していた古墳が炭窯であることが判明した。また、中央平坦面にトレンチを設定して掘削を行った結果、新たに17号古墳を検出した。

発掘調査の対象となった古墳は全て石室が開口していたことから、石室内からの遺物の出土は少なかった。主体部の調査に続いてトレンチおよび周溝の確認を順次行い、掘削調査完了後の8月22日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。その後、深いトレンチなどの埋め戻しを行い、9月8日に機材を撤収して発掘調査を一旦終了した。

当初計画では以上の調査を持って発掘調査を終了し、丘陵を下から掘削していく工事の段階で立会調査を行い、残る施工範囲の確認作業を行う予定であったが、工事計画の変更で先に工事用道路を建設し、丘陵を地下げする方法になったため、平成26年度に墳丘の掘削を主とした発掘調査を行うこととなった。再び繁茂していた竹などの伐採を待ち、平成26年9月22日に機材を搬入し、26日より人力による墳丘の掘削を開始した。廃土捨て場の確保も困難だったため、11号墳北側墳丘を掘削し、図化した後その部分に廃土を置き、順次墳丘および地山の掘削を行っていった。作業中には2度、重機を使用して廃土の土固めを行った。西側の落ち際に近い部分は急斜面だったため、一部掘削ができなかったが、それ以外は10月前半で発掘作業を完了し、10月15日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、10月16日に発掘機材等を撤収し、発掘調査を完了した。



樹木伐採時の山口古墳群



ラジコンヘリによる空中写真撮影

## 2 調査・整理の組織

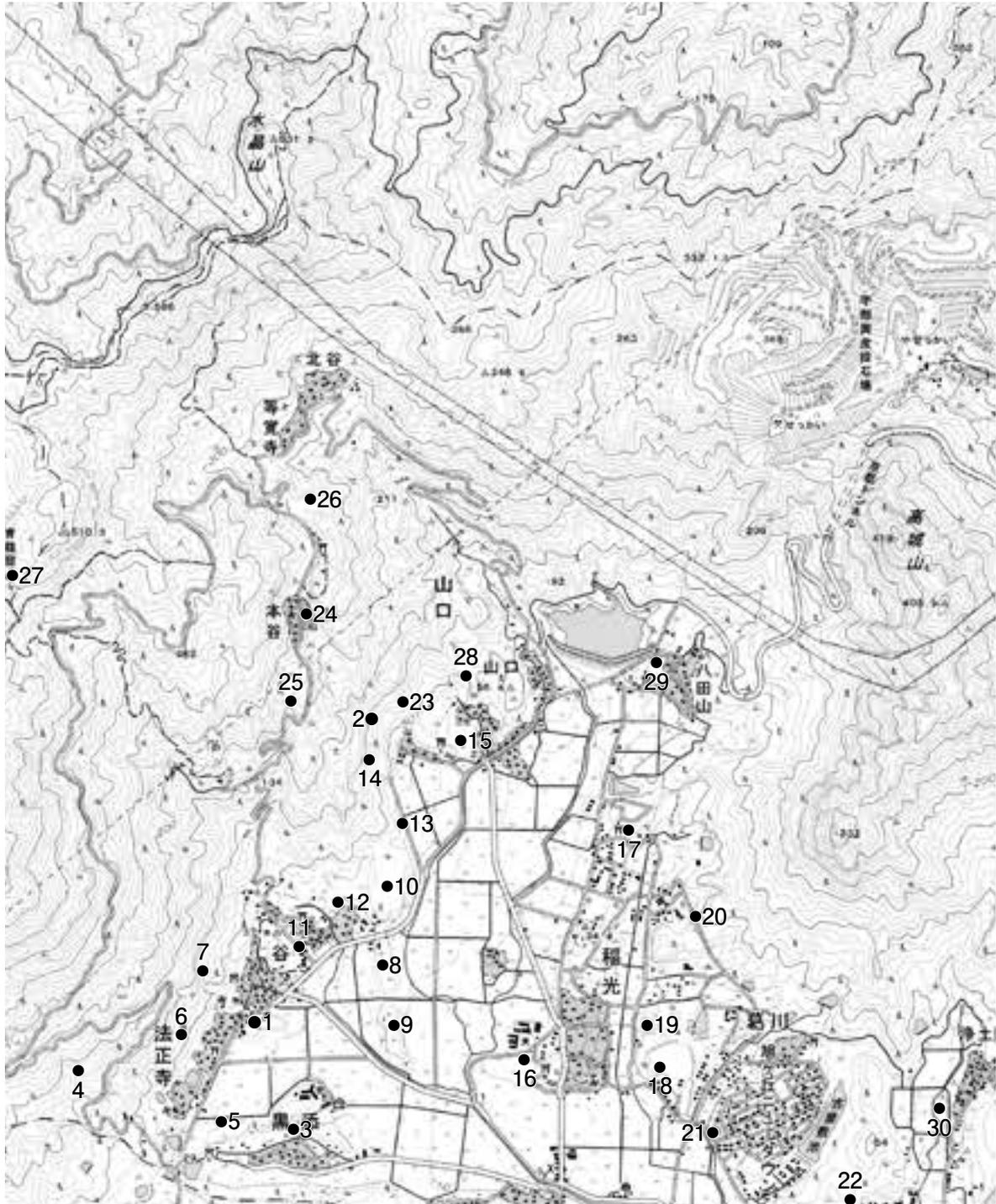
平成18年度の法正寺遺跡群第2次調査、平成22・23・26年度の山口古墳群発掘調査、令和4年度の整理・報告書作成に伴う組織体制は以下のとおりである。

	平成18年度	平成22年度
福岡県教育委員会		
教育長	森山 良一	杉光 誠
教育次長	清水 圭輔	荒巻 俊彦

総務部長	大島 和寛	今田 義雄
文化財保護課長	磯村 幸男	平川 昌弘
副課長	佐々木隆彦	伊崎 俊秋
参事	新原 正典	
参事兼課長技術補佐	池邊 元明	小池 史哲
	小池 史哲	
課長補佐	安川 正郷	日高 公德
管理係長	井手 優二	富永 育夫
調査第一係長	小田 和利	吉村 靖徳
調査第一係	吉田 東明 (調査)	吉田 東明 (調査)
調査補助員	海出 淳平	

	平成 23 年度	平成 26 年度	令和 4 年度
<b>福岡県教育委員会</b>			
教育長	杉光 誠	城戸 秀明	吉田 法稔
副教育長			上田 哲子
教育次長	荒卷 俊彦	西牟田 龍治	
総務部長	今田 義雄	川添 弘人	
教育総務部長			松永 一雄
文化財保護課長	伊崎 俊秋	赤司 善彦	明永 好弘
参事			田上 稔
課長技術補佐兼			
企画・埋蔵文化財係長			杉原 敏之
課長補佐			赤間 寛人
管理係長			広津 壽子
企画・埋蔵文化財係			城門 義廣 (整理・報告)
<b>九州歴史資料館</b>			
館長	西谷 正	杉光 誠	城戸 秀明
副館長	南里 正美	伊崎 俊秋	
副館長兼			
文化財調査室長			吉村 靖徳
総務室長	圓城寺 紀子	塩塚 孝徳	黒岩 計光
文化財調査室長	飛野 博文	飛野 博文	
大宰府調査班長			吉田 東明 (整理・報告)
文化財調査班	城門 義廣 (調査)	城門 義廣 (調査)	

なお、発掘調査および整理作業にあたり、御理解・御協力いただいた関係各位に感謝申し上げます。



- |             |              |               |             |             |
|-------------|--------------|---------------|-------------|-------------|
| 1. 法正寺遺跡群   | 7. 法正寺堂ノ上古墳群 | 13. 山口南古墳群    | 19. 富塚古墳群   | 25. 等覚寺関連遺跡 |
| 2. 山口古墳群    | 8. 谷遺跡       | 14. 倉石古墳群     | 20. 金林古墳群   | 26. 等覚寺北遺跡  |
| 3. 黒添遺跡群    | 9. 神後古墳群     | 15. 山口遺跡群     | 21. 葛川遺跡    | 27. 青龍窟     |
| 4. 黒添メオト塚古墳 | 10. 谷神後遺跡群   | 16. 稲光遺跡群     | 22. 岩屋古墳群   | 28. 山口北古墳群  |
| 5. 木ノ坪遺跡    | 11. 谷遺跡群     | 17. 松蔭天疫神社古墳群 | 23. 山口平原古墳群 | 29. 八田山遺跡群  |
| 6. 黒添古墳群    | 12. 谷南古墳群    | 18. 正覚寺古墳群    | 24. 等覚寺遺跡   | 30. 浄土院遺跡群  |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

今回報告する法正寺（HŌSYŌJI）遺跡群と、山口（YAMAGUCHI）古墳群は、福岡県東部の京都郡荻田町に位置している。荻田町は面積 46.6km<sup>2</sup>、人口 3.5 万人ほどで、東は周防灘に面し、北ならびに西は北九州市と接しており、西側にはカルスト地形の貫山・平尾台山系が広がる。南は同一平野内で行橋市と接している。町内には国際貿易港である荻田港、さらに沖には北九州空港があり交通の面で発達しているほか、沿岸部には臨海工業地帯が広がり、工業都市としても栄える。法正寺遺跡群、山口古墳群は京都平野の北端に位置する。京都平野の北側には平尾台山系から東・南側に向かって比較的急峻な丘陵が延びており、平野内には段丘地形が発達している。行橋市長井地区から稲童地区にかけては、海岸沿いに標高 10m 前後の海岸段丘が見られる。河成段丘は行橋市高来、入覚、みやこ町宮原まで標高 50～90m の高位段丘が広がり、さらに盆地を取り囲むように今川・長峽川・祓川の 3 つの河川水系により形成された標高 15～30m の中位段丘がある。さらに河川水系の扇状地では標高 10～15m ほどの低位段丘がみられ、特に今川周辺でよく観察される。一方で低地も平野東北部を中心として広く発達している。小波瀬川・長峽川流域では低湿な地帯が東西に広く分布しており、海岸から 5km 内陸まで標高 5m 以下の地域が広がり、10m 以下の地域も 7～8km 内陸まで広がっている。この付近では縄文海進期や古墳時代には海が平野内部まで入り込んでいたことが推測されている。

法正寺遺跡群は、桶ヶ辻と称される標高 568m の山頂部から東側に派生した山麓にあり、現在では西側に広がる集落部と県道荻田採銅所線によって山麓と分断され独立丘陵状を呈している。周辺の山麓や丘陵部には数多くの古墳が群集する。山口古墳群は桶ヶ辻から北東方向、標高 531.2m の水晶山から南東方向に派生する山麓部に位置する。周辺の山麓には、やはり古墳群が群集し、また、現在宅地や田畑地として利用が進む山麓部から平地部への変換点付近は、古墳群と集落遺跡とが混在した様相を呈している。

### 2 歴史的環境

ここでは、法正寺遺跡群第 2 次と山口古墳群に関連する周辺遺跡について記述を行う。

弥生時代の遺跡では、葛川遺跡で貯蔵穴を囲む環濠が確認され、前期の大規模な環濠集落として著名である。また、今回報告する法正寺遺跡群の近隣では、昭和 60 年に発掘調査が行われた黒添宮の下遺跡で前期後半の貯蔵穴、木ノ坪遺跡で前期末～中期初頭の円形建物跡が検出されている。山口古墳群に近い位置にあり、平成 3 年度に発掘調査が行われた山口遺跡の発掘調査でも、やはり前期末～中期初頭頃と思われる円形建物跡や複数の貯蔵穴が検出されている。中期の遺跡は数少ないが、葛川遺跡では中期後半の竪穴建物跡が確認されている。続く弥生時代後期の遺跡には平成 6・8 年度に発掘調査が行われた稲光遺跡があるが、やはり調査された遺跡数としては多くない。

古墳時代の荻田町は、周防灘に面した沿岸域に大型前方後円墳が築造されたことで知られている。前期には墳長 110m、三角縁神獣鏡 10 数枚をはじめ冑、鞆、素環頭大刀、鎌などが出土したとされる国指定史跡石塚山古墳があり、中期には墳長 120m で埴輪、銅鏡、装身具、馬具などが出土した国指定史跡御所山古墳がある。後期に築造された墳長約 50m の番塚古墳は主体部が未掘であっ

たため、銅鏡のほか、朝鮮半島由来の鳥足文土器、蛙形金具、蓮華文大刀など豊富な副葬品が遺存していた。今回報告する古墳群の近くには神護前方後円墳の所在が知られている。5世紀第3四半期の築造とされるが、石室等大破しており詳細は不明である。また、法正寺遺跡群の周辺には黒添古墳群や法正寺神社古墳群、谷南古墳群等の後期群集墳が濃密に分布している。山口古墳群の周辺にも倉石古墳群、山口北古墳群、山口平原古墳群などが分布しており、付近は後期・終末期群集墳の一大密集地を形成している。その他、山口遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓も確認されている。古墳時代の集落跡には山口遺跡、近衛ヶ丘遺跡、法正寺木ノ坪遺跡、谷遺跡等が挙げられる。近衛ヶ丘遺跡群では弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴建物跡が検出された。法正寺木ノ坪遺跡で弥生時代後期～古墳時代中期、黒添・赤木遺跡で中期の竪穴建物跡が見ついている。谷遺跡では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての畿内・瀬戸内系の土器や小型仿製鏡が出土している他、古墳時代中・後期の竪穴建物跡も確認されている。また、本事業と同じく、苺田採銅所線の改良事業に伴って平成6年度に福岡県教育委員会が発掘調査を実施した、大字山口に所在する大鎧遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物跡が複数見つかった。

古代になると、苺田町内には西海道の「刈田」駅が設置され、その位置は『和名抄』に見える京都郡刈田郷付近に比定する説が有力である。雨窪遺跡群では万年通宝銭、銅椀、緑釉陶器、土馬、墨書土器、製塩土器などが出土しており、刈田駅との関係が示唆されている。黒添・赤木遺跡では8世紀末～9世紀初頭頃の竪穴建物跡が複数等検出され、谷遺跡群では古代の住居跡や掘立柱建物跡が検出された。ここでは緑彩陶器の碗蓋や唐三彩の陶枕片が出土している。

中世になると、南原西門田遺跡で12～14世紀の掘立柱建物跡が検出されており、社寺関連遺構との想定がなされている。山口遺跡群では12～14世紀の龍泉窯、同安窯、景德鎮窯系の陶磁器が多量に出土している。山口古墳群の北側山腹にある等覚寺地区には山岳信仰遺跡の存在が知られており、彦山六峰の一つ、普智山等覚寺が置かれていた。国重要無形文化財「等覚寺の松会」はこの山岳信仰に因んだ行事である。

#### 【参考文献】

- 苺田町教育委員会 1984『葛川遺跡』苺田町文化財調査報告書第4集
- 苺田町教育委員会 1986『山口南古墳群』苺田町文化財調査報告書第5集
- 苺田町教育委員会 1987『黒添・法正寺地区遺跡群』苺田町文化財調査報告書第6集
- 苺田町教育委員会 1990『谷遺跡調査報告書』苺田町文化財調査報告書第11集
- 苺田町教育委員会 1993『山口遺跡』苺田町文化財調査報告書第21集
- 苺田町教育委員会 1998『稲光遺跡Ⅰ・Ⅱ区発掘調査概報』苺田町文化財調査報告書第30集
- 苺田町教育委員会 2000『近衛ヶ丘遺跡群（Ⅰ・Ⅱ地区）』苺田町文化財調査報告書第33集
- 苺田町教育委員会 2000『苺田町の文化遺産』苺田町文化財調査報告書第34集
- 苺田町教育委員会 2013『百合ヶ丘古墳群』苺田町文化財調査報告書第45集
- 苺田町 2005『軌跡 かんだの歴史』苺田町合併50周年記念誌
- 九州歴史資料館 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告5 岩屋古墳群・上片島遺跡群』
- 九州歴史資料館 2014『上片島遺跡群6地区』国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第2集
- 福岡県教育委員会 1999『大鎧遺跡・倉谷古墳群』福岡県文化財調査報告書第140集
- 福岡県教育委員会 2004『雨窪遺跡群』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告1

### Ⅲ 法正寺遺跡群第2次発掘調査の記録

#### 1 発掘調査の内容

##### 1) 遺跡の概要 (図版1、第3～5図)

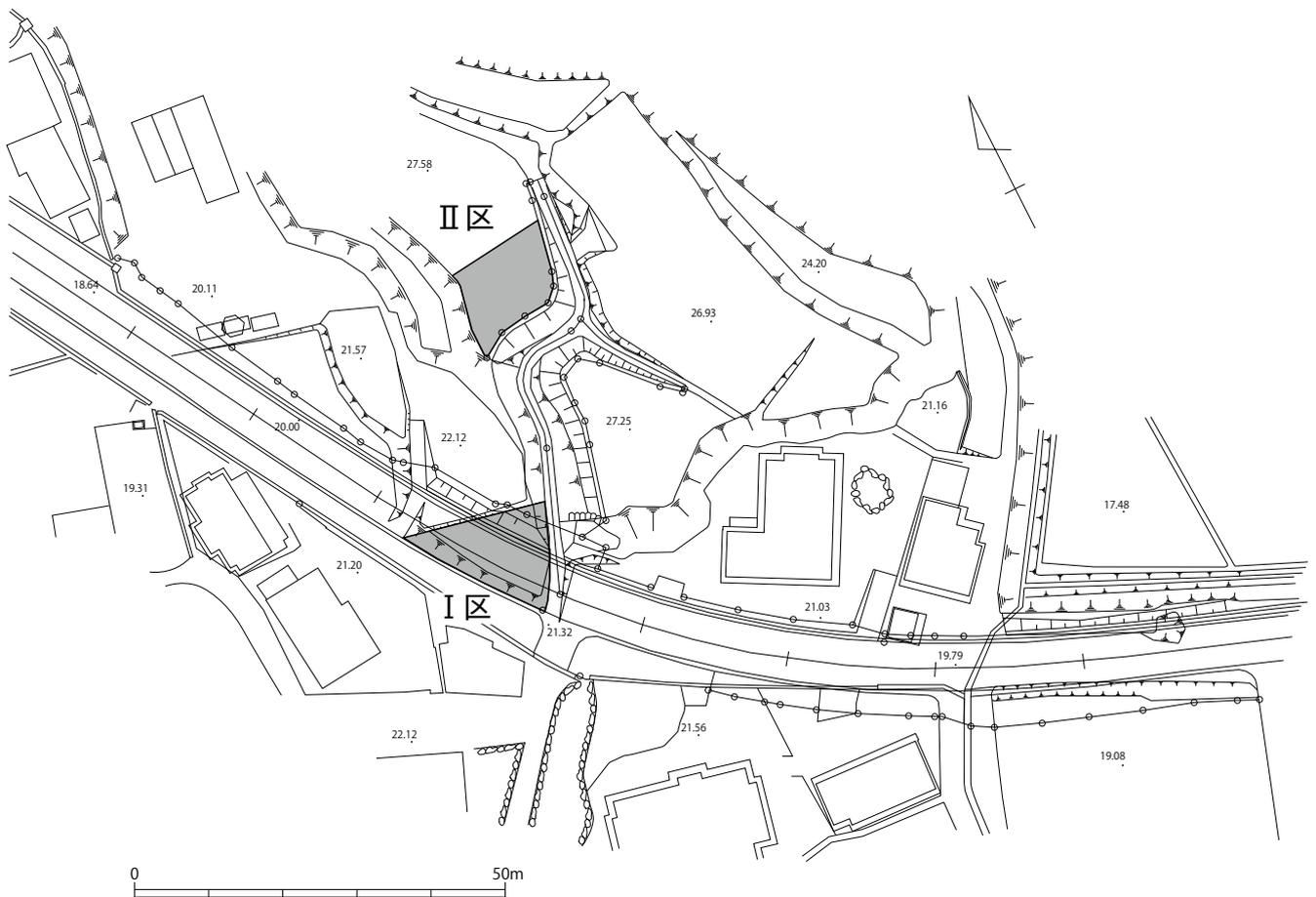
法正寺遺跡群は、桶ヶ辻と称される標高568mの山頂部から東側に派生した山麓にあり、山裾を通る県道荊田採銅所線によって、現状では山麓部から独立した丘陵状を呈している。

発掘調査区は二ヶ所に分かれており、道路際に位置する荊田町法正寺352-1番地をⅠ区、丘陵上に位置する荊田町法正寺372番地をⅡ区と呼称することとした。標高はⅠ区が22.6～22.7m、Ⅱ区が27.4～27.7m、調査面積はⅠ区が290㎡、Ⅱ区が360㎡である。発掘調査期間は平成18年10月5日～10月23日である。

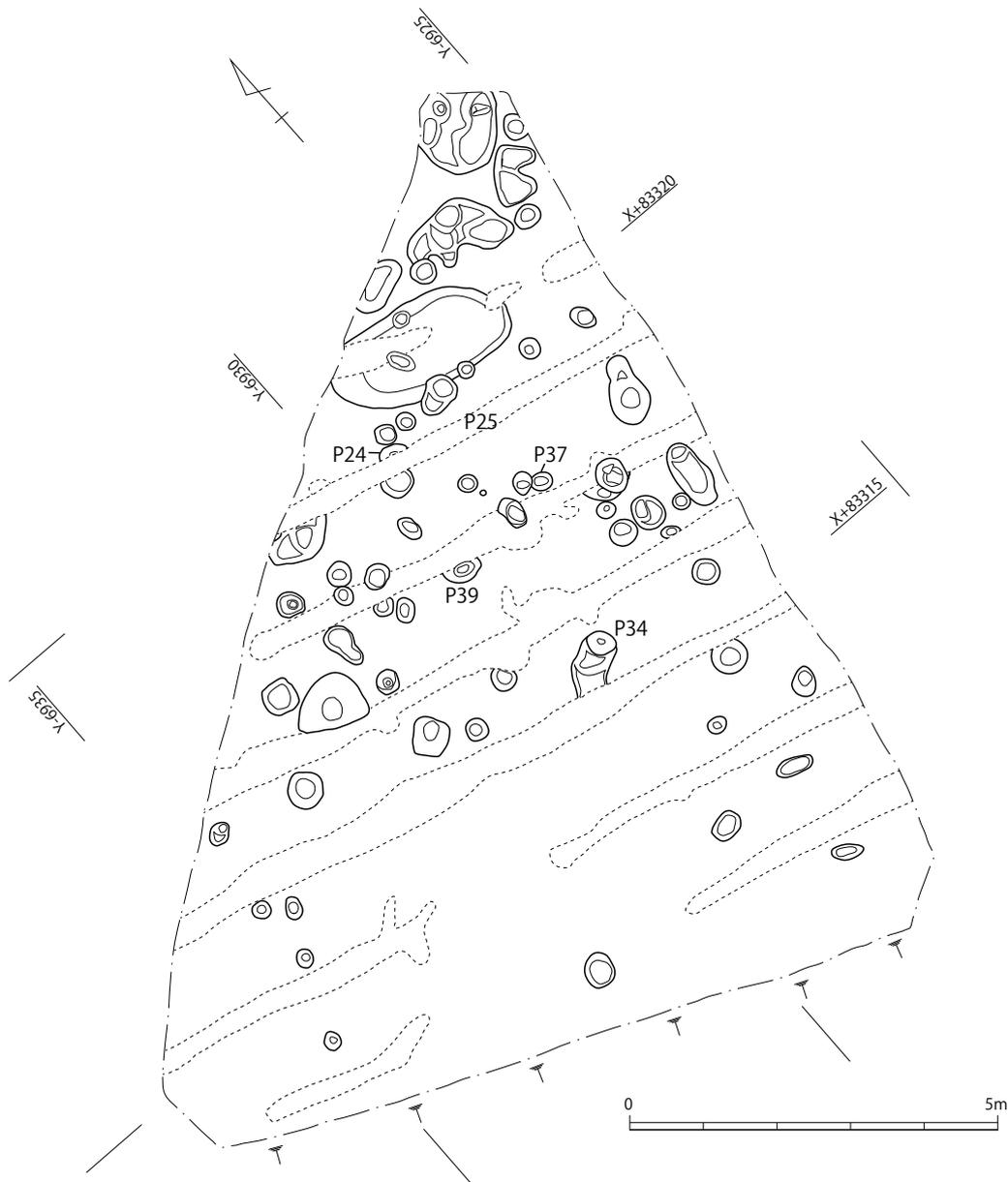
発掘調査によって検出された遺構は、弥生時代の土坑2基の他、弥生・古代・中世のピットである。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、石器、土製品、鉄製品がある。出土遺物の量はパンケースで1箱を数える。

##### 2) 遺構と遺物

###### 土坑



第3図 法正寺遺跡群第2次調査位置図 (1/1,000)



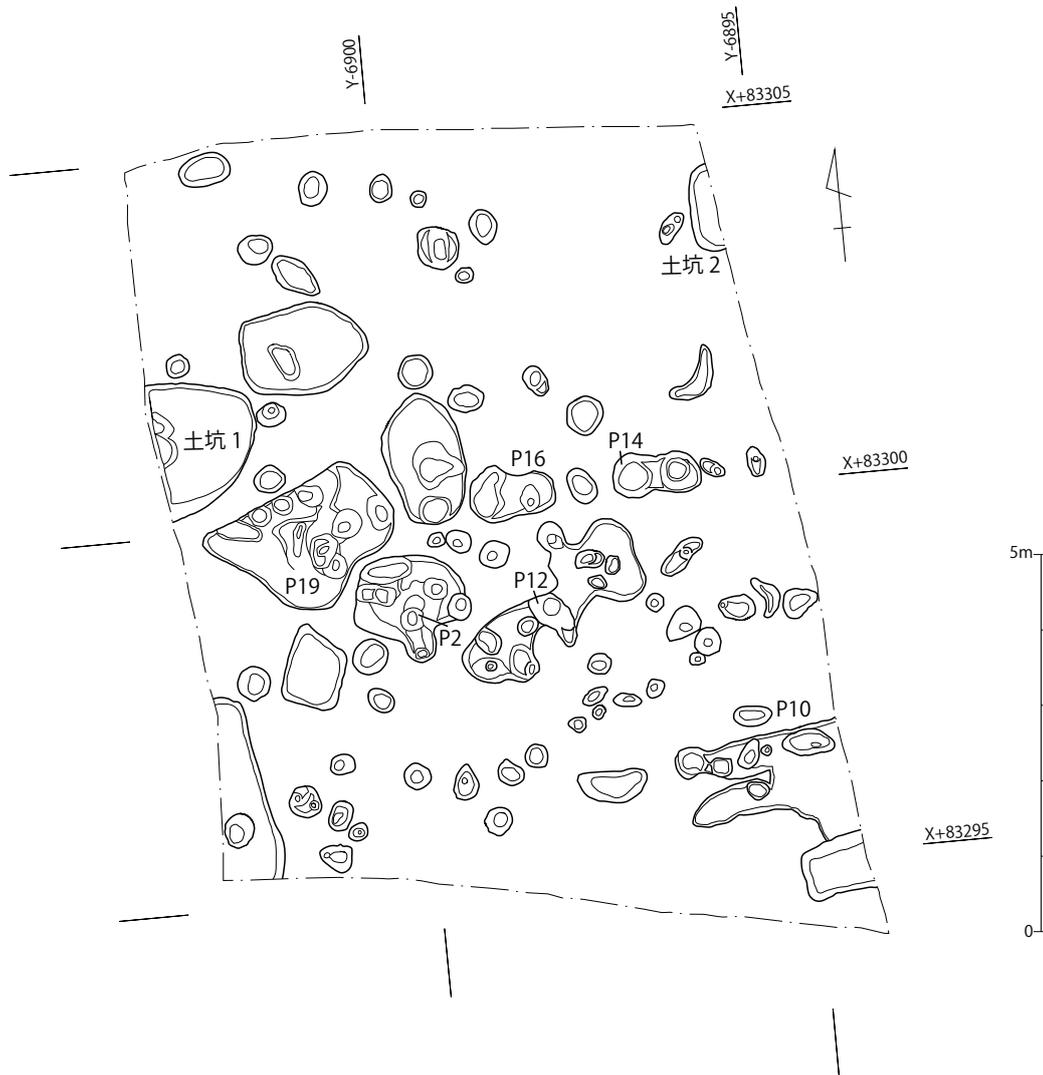
第4図 法正寺遺跡群第2次調査 I区遺構配置図 (1/100)

### 1号土坑 (図版2、第6図)

II区西端で検出した土坑である。西側が調査区外へと続いている。南北方向に200cm、東西方向に120cmの長さを測り、平面形は円形プランを呈す。底面までの深さは130cmを測り、壁面は垂直に近い急傾斜である。底面の中央では深さ15～20cmの二つのピットが検出されている。

断面土層図の観察によると、基本層序は表土下に第2層の暗灰褐色土層が堆積しており、これには遺物が包含される。その下層にある第20層黄褐色土層中には遺物が含まれず、したがってこの第20層の上面を遺構検出面とした。1号土坑はこの第20層上面から切り込む形で検出されている。

1号土坑の覆土は大きく第3層～第10層までの上層と、第11層～第17層までの下層とに区分



第5図 法正寺遺跡群第2次調査 II区遺構配置図 (1/100)

される。第18・19層は土坑底面で検出したピットの覆土である。上層のうち第9・10層は明確なピット状を呈しており、柱痕跡として良いものと思われる。下層のうち第11層灰褐色土層中には炭や焼土粒を含んでおり、下方に堆積する第14層～17層はブロック状の土を含んだ層である。

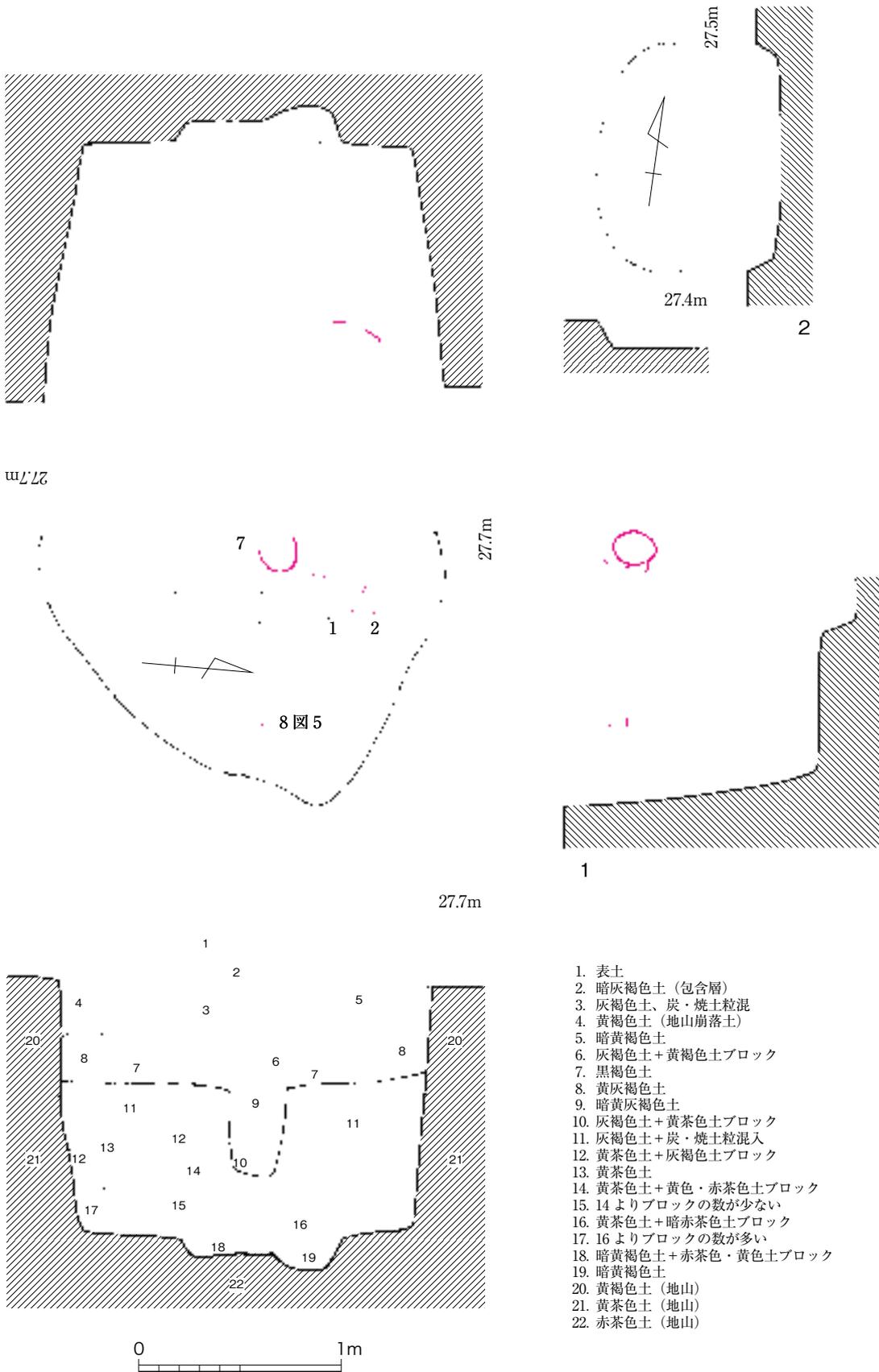
土層観察による所見では、土坑使用後に土砂がある程度堆積し、その後、第11層上面まで埋まった段階で再度整形、使用したものと解釈される。底面の二つのピットと第11層上面から切り込むピットがどちらも土坑中央に位置していることから、どちらも土坑中央に柱を立てた痕跡として理解して良いものと思われる。

遺物は第7図に図示した1・2・7の他、覆土中から第7図3・4・6の弥生土器、第8図1の黒曜石石鎌、2の水晶石核、3の打製石斧、5の石包丁、6の砥石が出土した。

**出土土器** (図版3、第7図1～7)

**弥生土器** (1～6)

1～6は弥生土器甕である。



第6図 1・2号土坑実測図 (1/30)

1・2は土坑上層から出土しており、接合しないが同一個体である。1は短く外反する口縁部を呈し、端部は丸みを有している。体部上半にはほとんど丸みを持たず直立気味に立ち上がっている。体部下半は直線的にすぼまり底部へと至る。器表の摩滅が著しいが、内面はナデ、外面にはわずかに縦ハケ目が認められる。口径22.2cmに復元される。

3は端部外面に刻目のある甕口縁部片である。口縁部下には二条の沈線が巡る。下層から出土。

4は外側に短く伸びるL字状の口縁部である。上面はわずかに内傾しており、内端部は内側に尖っている。摩滅が著しく調整不明。

5は甕体部片である。小片のため傾きは不明。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。土坑上層から出土。

6もやはり甕体部片である。内面ナデ、外面は幅の狭い縦ハケ目調整を行っている。土坑下層から出土。

### 土師器 (7)

7は土師器甕である。口縁部はわずかに内湾しながら開いており、端部は面をなす。口縁部下の屈曲部から体部上半にかけては丸みがなく直線的に傾斜している。体部下半は丸みを帯びており底部は丸底となる。体部上半よりも下半の方が径が大きく下膨れの形状となる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はナデ調整で指圧痕が多く残る。体部外面は縦ハケ目調整を行う。口径33.2cm、器高26.5cm。

形状の特徴から明らかに古代の土師器であり、他の出土遺物とは大きく時期が異なる。1号土坑の時期は弥生時代中期として問題ないため、遺構検出時には確認できなかったが1号土坑に重複する古代の遺構があったものと思われる。

### 2号土坑 (図版2、第6図)

Ⅱ区北東端で検出した土坑である。東半部が調査区外へと続いており、現状では南北110cm、東西50cmの楕円形状を呈している。底面はほぼ水平で、検出面からの深さは10～15cmを測る。

覆土中から弥生土器が出土した。

### 出土土器 (図版3、第7図8・9)

#### 弥生土器 (8・9)

8・9は弥生土器である。

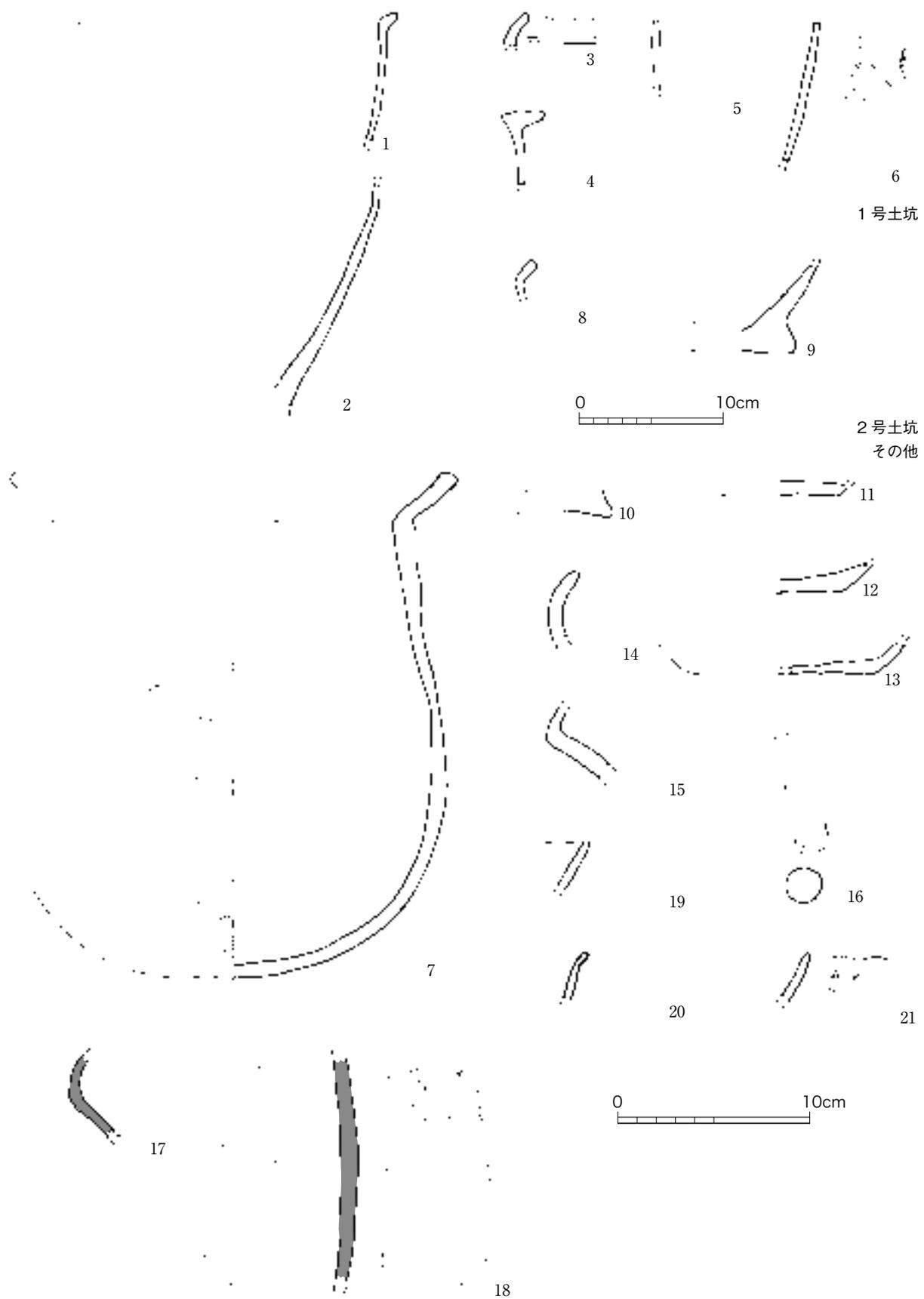
8は弥生土器甕の口縁部片。口縁部下は屈曲しており内側に不明瞭な稜線を残す。口縁端部は面をなしており、上端は丸みを有している。器表は摩滅しており調整不明。

9は弥生土器甕の底部片である。底部の器壁は比較的厚く、裾が外側に張った形状となる。底部から体部へは大きく開きながら立ち上がるようである。内面は摩滅のため調整不明、外面には縦ハケ目が確認される。底径7.2cm。

### その他の出土土器 (図版3、第7図10～21)

#### 弥生土器 (10)

10は弥生土器甕の底部片である。高さのある厚い底部で接地面の内側は浅くくぼんでいる。端部は丸みを有しており裾が開いた形となる。底径6.6cm。包含層出土。



第7図 法正寺遺跡群第2次調査出土土器実測図 (1～6、8～10：1/4、他：1/3)

### 土師器 (11～16)

11 は土師器小皿である。底径 6.4cm。底部は器表が摩滅しており調整不明。試掘調査時に出土。

12・13 は土師器皿である。12 の器表は摩滅しており調整不明。底径 6.6cm。体部は直線的に開いている。P-16 出土。

13 は内面に横ナデが観察される。外面の調整は器表が摩滅しており不明。底径 9.4cm。底部と体部の境目は丸みを有しており不明瞭である。廃土中から採集。

14・15 は土師器甕の口縁部片である。14 は器壁が比較的薄く、丸みを有しながら外反する口縁部である。端部は丸みを有している。器表の摩滅のため調整は不明。P-12 から出土。

15 は肩が丸く張った器形となり、口縁部との境目の内側には稜を有している。口縁部は体部に対して器壁が薄く、大きく開きながら立ち上がるようである。器表の摩滅のため調整不明。P-19 から出土。

16 は脚付鍋の脚部片である。棒状を呈しており断面は丸い。器表には指整形の際の稜線が認められる。P-37 出土。

### 須恵器 (17・18)

17・18 は須恵器甕である。17 はあまり肩の張らない器形で、口縁部は緩やかに外反し屈曲部はあまり明瞭な稜をなさない。体部外面には平行タタキ、内面には同心円当て具痕が認められる。P-14 出土。

18 は大型の甕体部片である。傾きは不明。内面には工具によるナデの稜線が認められる。外面はナデ調整を行っている。P-10 出土。

### 陶磁器 (19～21)

19・20 は青磁碗である。19 は直線的に開く碗の口縁部片。P-25 出土。

20 は体部に深みがあり、口縁部は短く外側に開いた形状となる。表面には貫入が認められる。廃土中から採集。

21 は染付磁器である。丸みを帯びた形状の小碗になると思われる。外面の口縁部下には呉須による文様が描かれている。P-25 出土。

### その他の出土遺物 (図版3、第8図1～9)

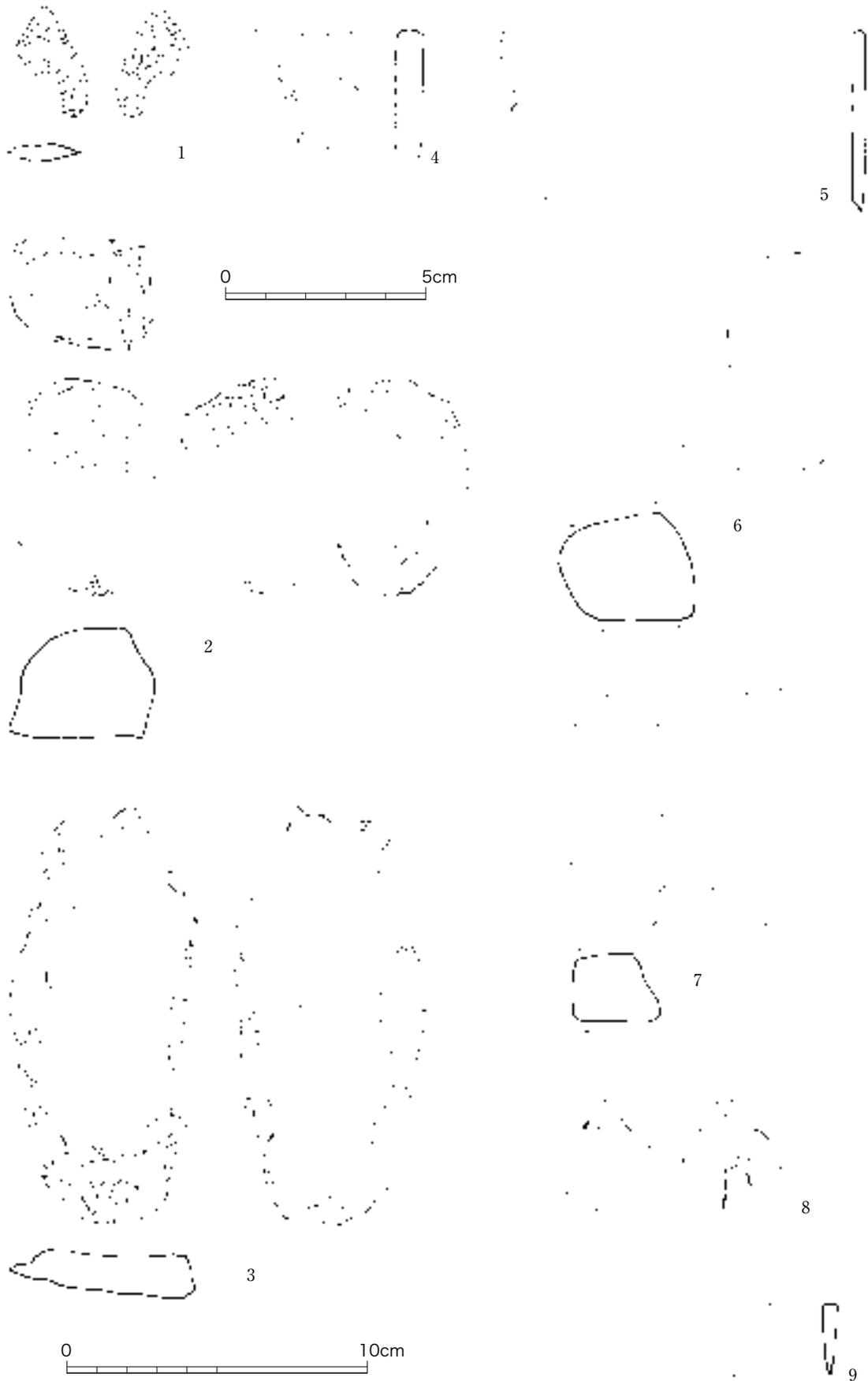
#### 石器 (1～7)

1 は黒曜石石鏃である。抉りの深い三角形鏃で丁寧な剥離調整を行っている。不純物を含まない良質な黒曜石を使用しており透明感がある。長さ 2.8cm。1 号土坑から出土。

2 は水晶の石核である。断面楕円形に近い形状の円礫原石の端部に打撃を加えて平坦面を作出し、その平坦面に打撃を加えることで剥片を得ようとしたことが分かる。下端部には剥片獲得時に形成された、潰れたような剥離痕が認められる。長さ 5.5cm、幅 3.6cm。自然面は風化が進み灰白色を呈しているが、断面は少し茶色味を帯びた透明色を呈す。1 号土坑上層から出土。

3 は砂岩質の打製石斧である。扁平な素材の側縁にのみ剥離調整を加えて石斧とするが、使用痕跡は明瞭ではない。表面の風化が進む。長さ 14.0cm、幅 7.4cm、厚さ 1.5cm。1 号土坑下層出土。

4・5 は石包丁である。4 は輝緑凝灰岩製である。小片だが穿孔部の形状や背部の形状は確認することができる。厚さは 0.9cm。P-39 出土。



第8図 法正寺遺跡群第2次調査出土石製品・土製品・金属製品実測図 (1・2:2/3、他:1/2)

5は層灰岩製である。大型に属する形状だが厚さは0.4cmと比較的薄い。刃部は片刃に成形される。表面の風化が進んでいる。長さ10.9cm、幅6.05cm。1号土坑上層から出土。

6・7は砥石である。6は凝灰岩製。二面に使用痕が認められるが不明瞭である。長さ7.5cm、幅4.7cm。1号土坑出土。

7は砂岩製。二面を使用しており、面の形成や端部の稜は明瞭である。長さ7.7cm、幅3.3cm。P-2出土。

#### 土製品（8）

8は土製の鈴である。土師質で胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用する。一部が欠損しており内部の土玉は失われている。高さ3.65cm、径3.1cm、孔径0.3cm。P-34出土。

#### 鉄器（9）

9は鉄製の刀子である。長さ8.9cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。P-24出土。

### 3) 小結

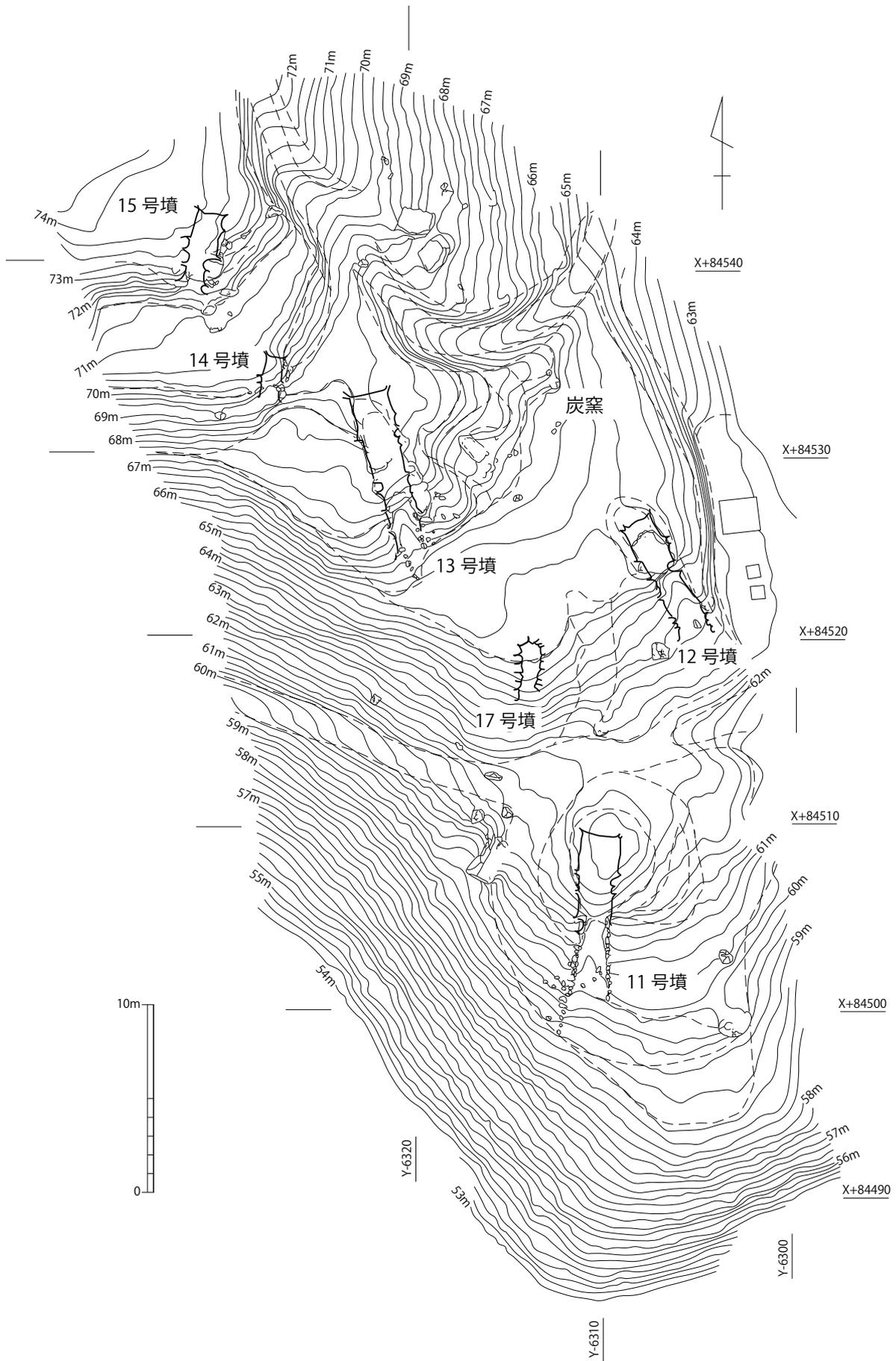
法正寺遺跡群第2次調査区は、山麓部から細長く伸びた低丘陵上に立地し、住環境に適した立地条件を備えていたものと思われる。今回の調査で出土した遺物の帰属時期も、弥生時代中期、古代、中世前期、近世、と複数の時期に亘っており、そのことを裏付けている。

検出した遺構のうち、Ⅱ区の1号土坑については弥生時代中期の貯蔵穴とみて問題ない。土坑底面の中央部にピットを備えている点は他にも類例があるが、ある程度埋まった段階でも使用している例や土層断面で柱穴が確認できた例は少なく、貯蔵穴の使用法が理解できる事例として重要である。また、Ⅰ・Ⅱ区で検出した多数のピットは掘立柱建物の柱穴を構成するものと思われるが、調査区が狭いこともあって建物構造を把握するまでには至らなかった。出土遺物は古代や中世前期に帰属するものであり、その時期に居住域として利用されていたことが理解できる。

出土遺物のうち、第7図1・3の如意形口縁の甕や端部に刻目を配しその下に沈線を巡らせる甕は弥生時代前期的な様相だが、3には複数の沈線を巡らせており、4は断面三角形状を呈すなど中期的の様相も見られる。土坑の帰属時期は弥生時代中期初頭として良いだろう。また、2号土坑の9も底部が厚く、やはり中期初頭として良いものと思われる。後世の混入として理解するに至った第7図7については、口縁端部が平坦面を有し、体部は重心を下位に置いた下膨れの形状で、内面はヘラケズリを行わずにナデ調整を行う特徴的な甕である。いわゆる「企救型甕」と称されるもので、8世紀後半から9世紀にかけて北九州市小倉南区から京都郡にかけて分布することが知られている。近隣では苅田町黒添・赤木遺跡で複数個体が出土している。その他、第7図16の三足鍋も周防から豊前を中心に出土する中世の煮沸具である。

第8図2の水晶製石核は、水晶山の名称の由来となった、水晶の産出地に近い場所ならではの遺物と言えるだろう。1号土坑から出土しており、弥生時代中期初頭に帰属すると考えられる。第8図3の打製石斧については、今回の調査では縄文土器は確認できなかったが縄文時代後晩期の所産と考えて良いものと思われる。

今回の調査は範囲も狭く、不明とせざるを得ない点もあったが、貴重な成果が挙げられた点も少なくはない。周囲には同時期の遺構の広がりが見られ、また集落遺跡ばかりでなく横穴式石室を主体部とする古墳の分布も確認されている。周辺遺跡の今後の調査が期待される。



第9図 山口古墳群地形測量図 (1/300)

## IV 山口古墳群の発掘調査の記録

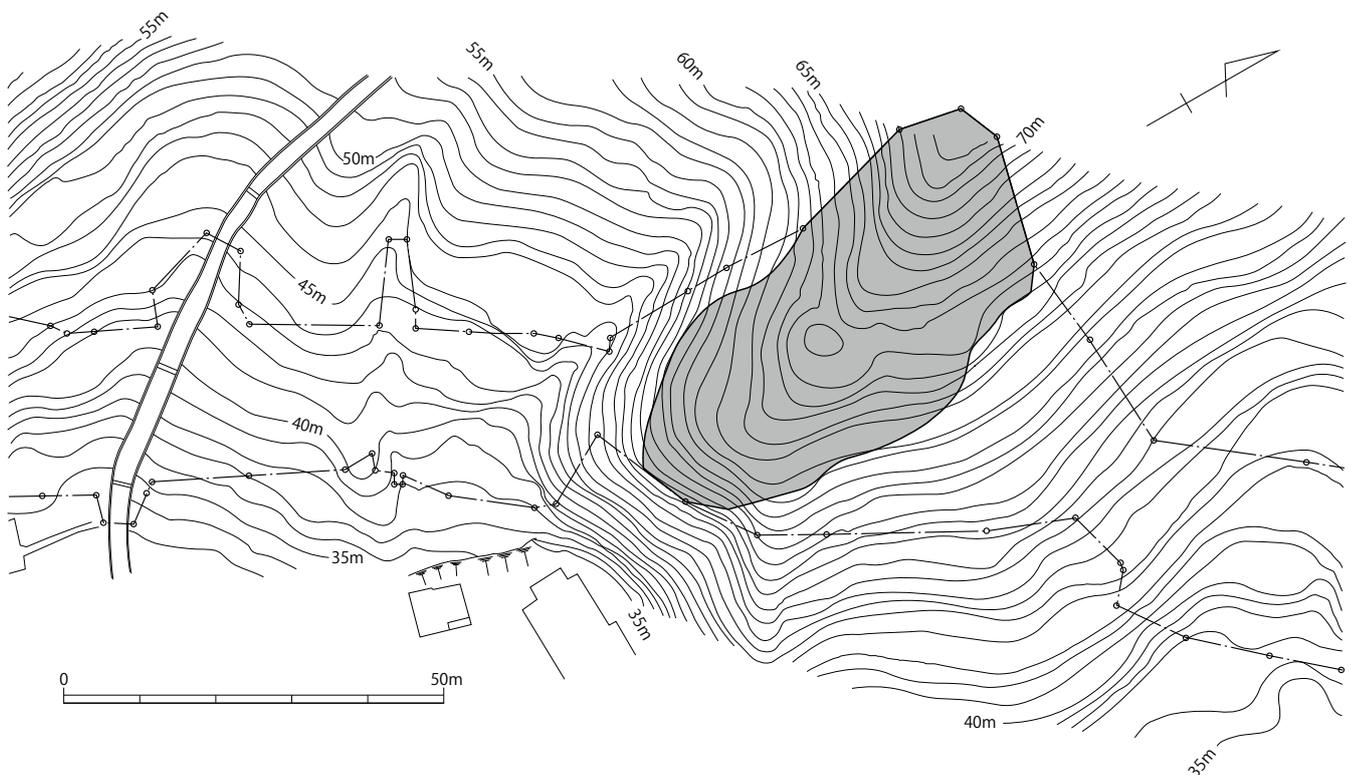
### 1 発掘調査の内容

#### 1) 遺跡の概要 (図版4、第9・10図)

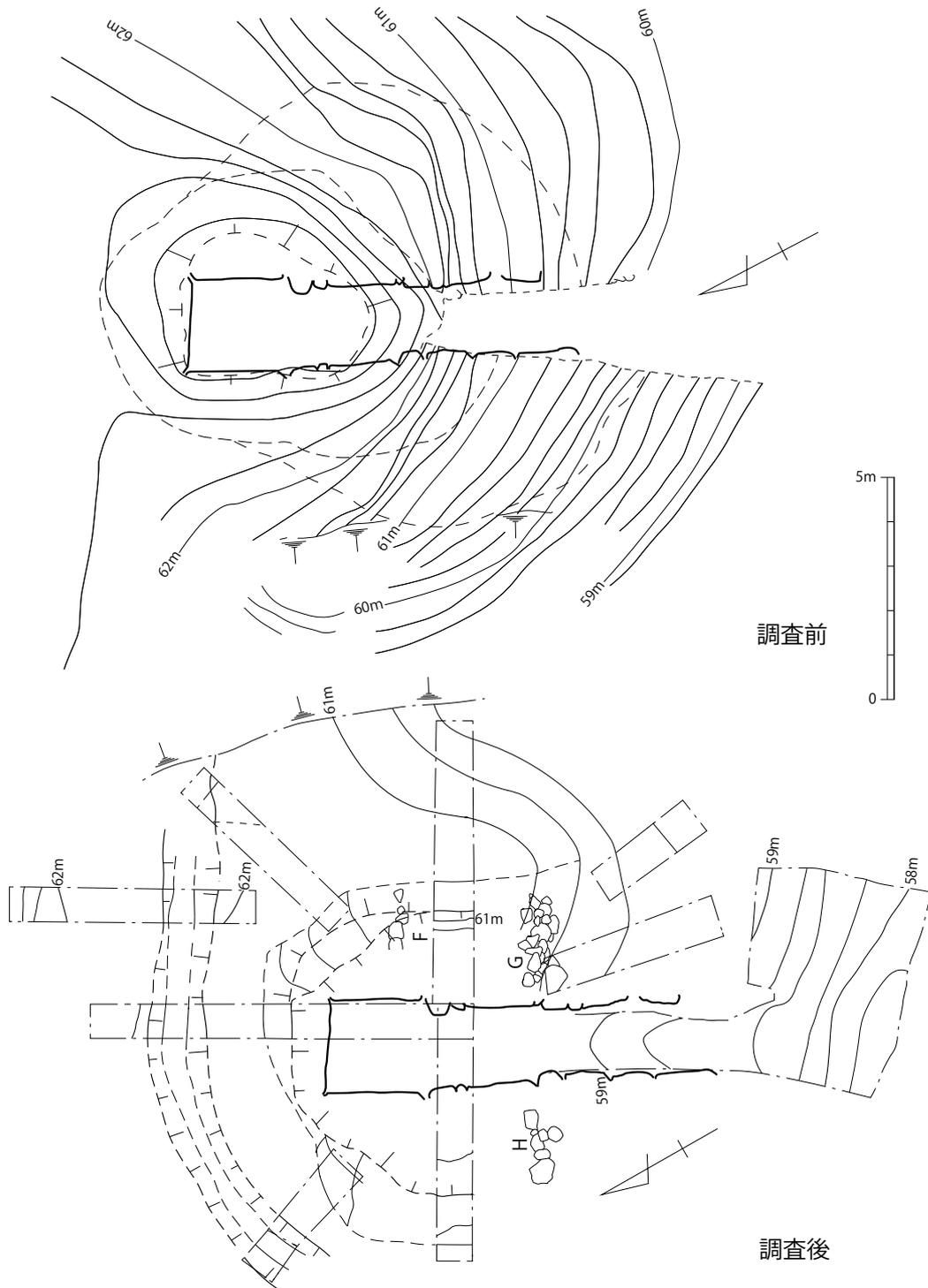
山口古墳群は、行橋平野の西北端、水晶山から延びる舌状台地上に位置する。標高は65m前後で、周囲の低地から40～50mの比高差がある。隣接する東側の丘陵には山口平原古墳群や山口北古墳群があり、西側丘陵には倉石古墳群、山口南古墳群があるなど、丘陵毎に古墳群が認められる。県道苅田採銅所線改良事業に伴い、計画路線内に位置する古墳に対して発掘調査を実施した。調査対象面積は6,750㎡である。

今回調査した古墳は、周知の埋蔵文化財包蔵地地図でその所在が周知化されていた「山口古墳群」12基のうちの5基、および新規発見1基の計6基である。6基すべてが円墳で、直径15mほどのものが2基と、径10mに満たない小型のものが4基確認された。前者は複室構造を持つもので、後者のうち1基は片袖の玄門を持つ。石室は1基を除いて全て開口しており、盗掘された痕跡が認められた。そのため、石室内での遺物の出土はほとんどないが、墓道を中心に遺物の出土が確認されている。

墳丘は、等覚寺に上る山道や現代の墓地へと至る里道が近年まで使用されていたこともあって、削平されている部分が多々見られた。特に13号墳は墳丘中に近代の炭窯が切り込む形で作られており、遺存状態は不良であった。外護列石や墳丘上祭祀などは認められなかった。



第10図 山口古墳群調査区位置図 (1/1,000)



第 11 図 11 号墳地形測量図 (1/150)

## 2) 遺構と遺物

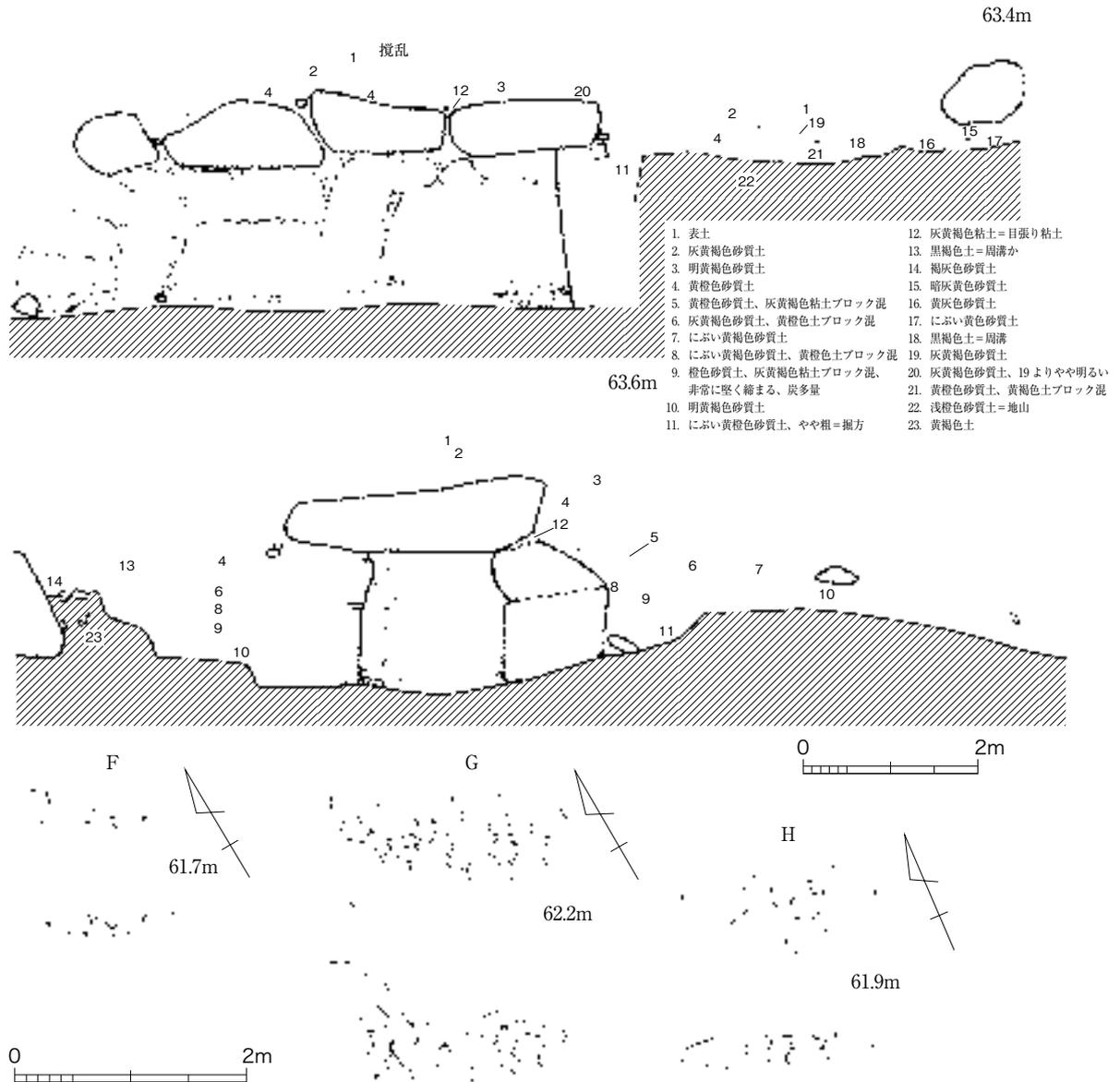
### 古墳

#### 11 号墳

##### 墳丘 (図版 5、第 11・12 図)

調査区の南端に位置し、丘陵の先端部にあたる。規模は裾部分で 10m、一部段落ちに切られるが周溝を含め 12.5m ほどになると考えられる。

前面からの高さ 3.2m、背面の高さ 0.8m が残存し、周溝は幅 1m 前後、深さ 0.3m ほどで、東お



第12図 11号墳墳丘・墳丘内列石実測図 (1/80、1/60)

よび南側では検出できなかった。

墳丘東側では6・7層の端部が盛り上がっており、カルデラ状に積んだことがわかる。天井石の隙間には白色粘土により目張りされる。

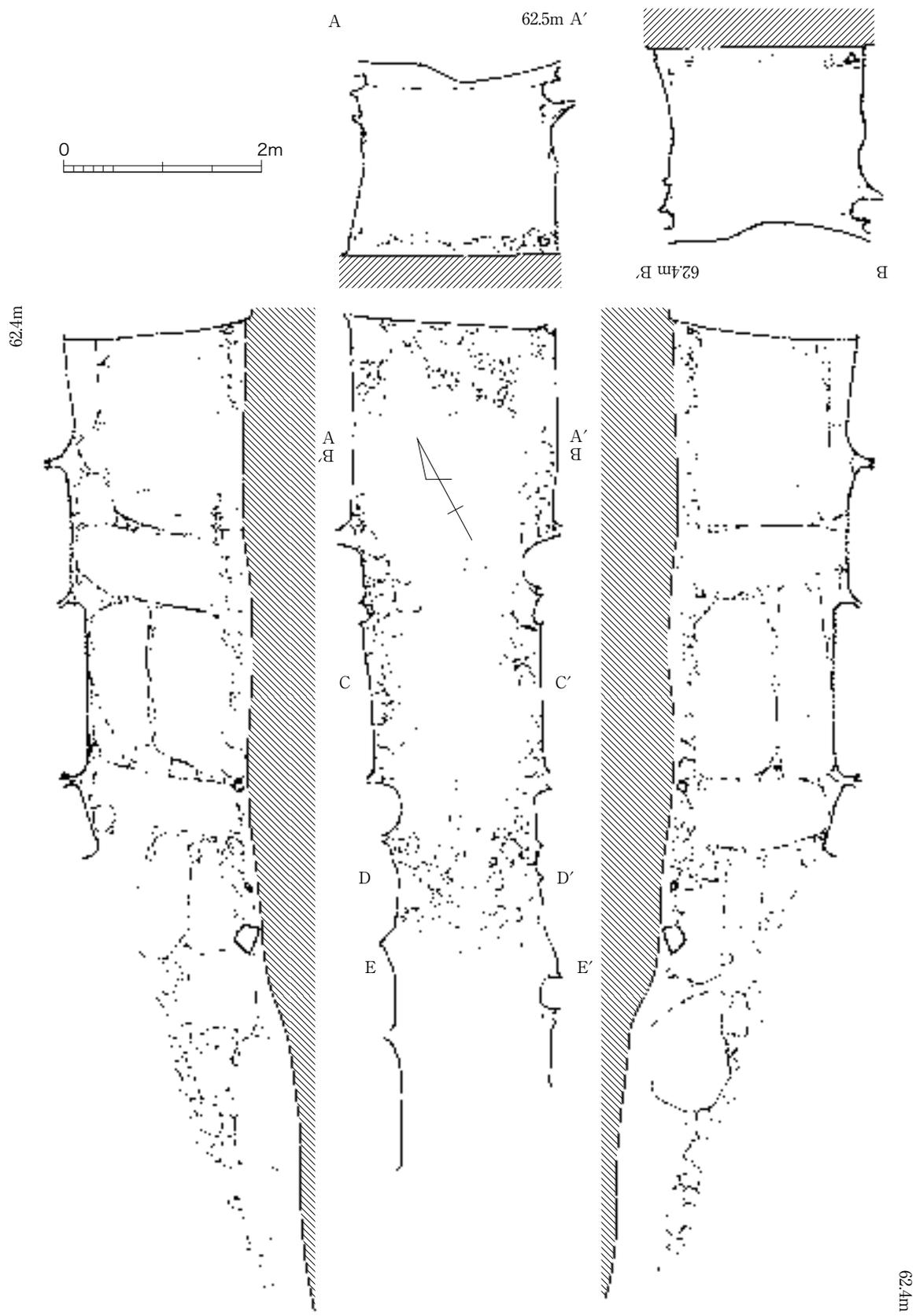
墳丘盛土内の前面東側 (G) では0.3～0.5m大の礫が積み重ねられており、墳丘内列石と考えられる。また、西側 (H) にも同様の礫が見られ、斜面側で危険のため全て掘削していないものの、同様の構造であろう。

東側の墳丘中央部 (F) には1段の礫が地山上に置かれており、これも墳丘内列石と考えられる。主体部掘方は7.0×7.5m、深さ0.8mで、掘方のほぼ中央に主体部が築かれる。

**主体部** (図版6、第13・14図)

**閉塞**

径20cmほどの円礫を、羨門部にほぼ接する位置から長さ1mほどの範囲で乱雑に積み、1段分が残存する。中央部が低くなっており、盗掘の際に一部破壊されたものと考えられる。



第 13 图 11 号墳主体部実測図① (1/60)



第 14 図 11 号墳主体部実測図② (1/60)

## 羨道・墓道

墓道は西側の列石の存在から4mほどと考えられ、幅1.2～2.0mほどと考えられる。羨道は敷石がほとんど残存せず、長さ2.0m、幅1.4m、高さ1.2mを測る。框石は0.4m、高さ0.2mの円礫が1つのみ残存する。

## 石室

規模は前室が長さ2.3m、幅1.7m、高さ1.4mで、奥室が長さ2.3m、幅2.1m、高さ1.6mを測る複室の横穴式石室である。

奥壁は2.0×1.7mの石を立て、側壁は前室が2枚、奥室が1枚の石をやや内傾させて並べる。前室・奥室共に、天井と床面の幅の差は0.2m程である。

前門は側壁の石を立てて配置することで表現され、左側で0.3m、右側で0.1mの突出が認められる。幅は1.4m、高さ1.35mである。玄門も前門と同様石を立てており、右側に0.3mの突出が認められるのみである。幅1.6m、高さ1.5mである。

天井石は幅1.0～1.6mの石が4枚残存する。石材はほとんど花崗岩を用いており、間に詰める小礫および敷石に、わずかに凝灰岩系の石材が用いられる。床面は盗掘時に大きく掘り込まれており、ほとんど残存していない。

遺物は左側壁の端からわずかに出土している。

## 出土土器（図版15、第15・16図）

### 弥生土器（1）

1は墓道から出土した如意形口縁となる弥生土器甕である。口縁部は緩やかに外反しており、端部には刻目を施文する。摩滅が著しく進んでおり内外面の調整は不明。

### 須恵器（2～45）

2～11は蓋である。2～4は口縁部片。どれも器壁が比較的薄い。2は器高がやや高く、口縁端部が内傾する器形となる。口径10.0cm。3・4は口縁部が外側に開いており、低い器形となるようである。

5～9は撮部片。器高の低い宝珠様の撮部となる。9は外面にヘラ記号が見られる。

10・11は短いかえりを有しており、蓋の口縁端部片として図示した。10は口径10.6cm、11は口径11.0cm。

12～18は坏口縁部片である。立ち上がりは断面三角形の低い形状となるものが多い。12・13は接合しないが同一個体である。12は復元口径11.4cm、13は10.4cm。14は口径11.6cm。15・16は立ち上がりの端部が外反気味に短く伸びる器形となる。17は低い三角形状で受け部との境が不明瞭である。

19・20は坏底部片である。19は底端部が丸みを帯びた器形となる。20は平底に近い。

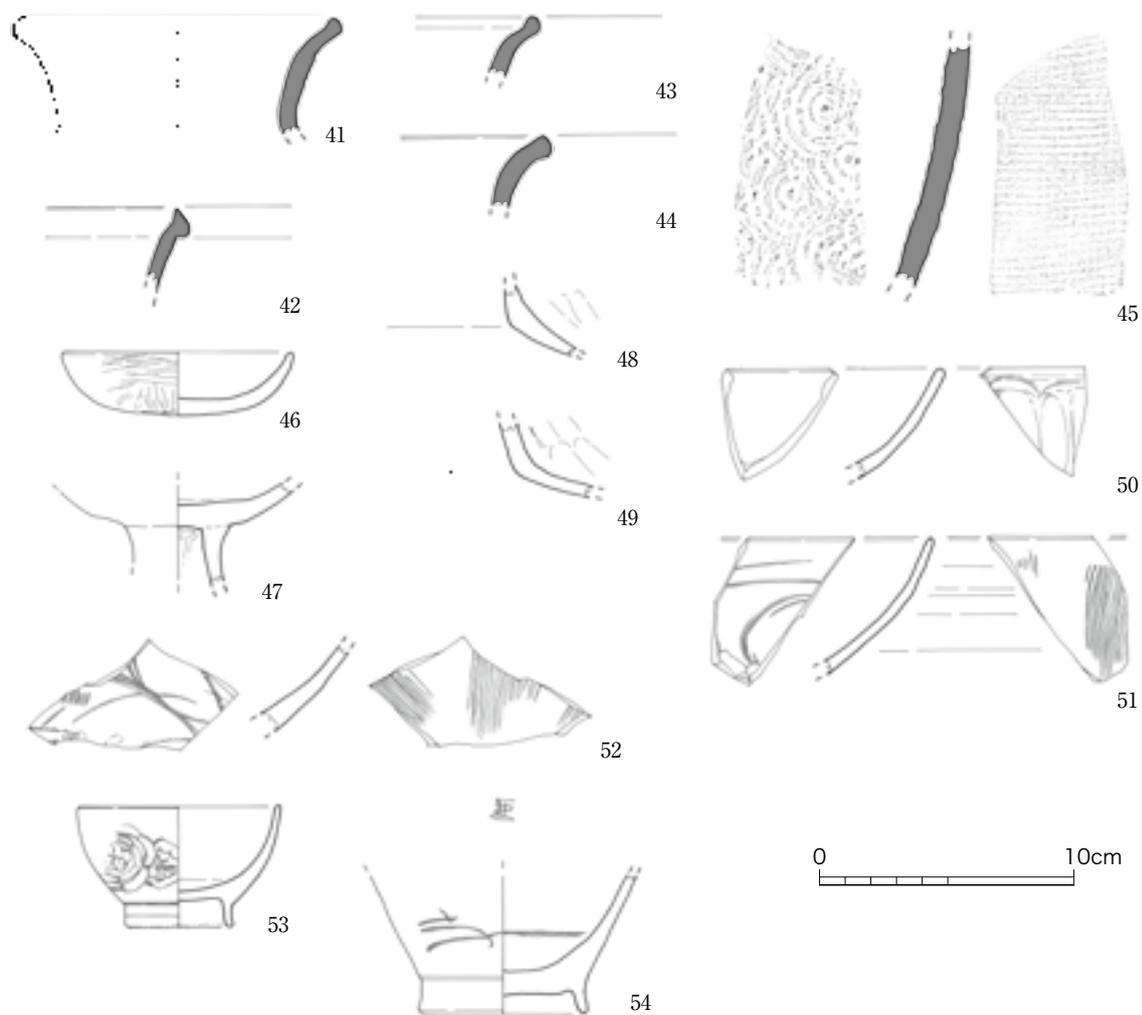
21～24は須恵器碗である。21は直線的に開く口縁部片。22は高台部片で、接地部が短く内側に突き出した形状となる。高台部径7.2cm。23は高台部が断面台形状を呈し、内端部で接地する。24は断面台形に近い形状で、やはり内端部で接地する。

25・26は低脚の須恵器高坏である。25は柱部中央に一条の太い沈線を巡らせる。裾端部は下方に尖っている。裾部径7.2cm。26もやはり柱部中央に一条の太い沈線を巡らせる。

27は須恵器甕の体部片である。外面の中位付近に一条の太い沈線を巡らせており、調整は内外



第15图 11号墳出土土器实测图① (1/3)

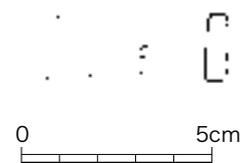


第16図 11号墳出土土器実測図② (1/3)

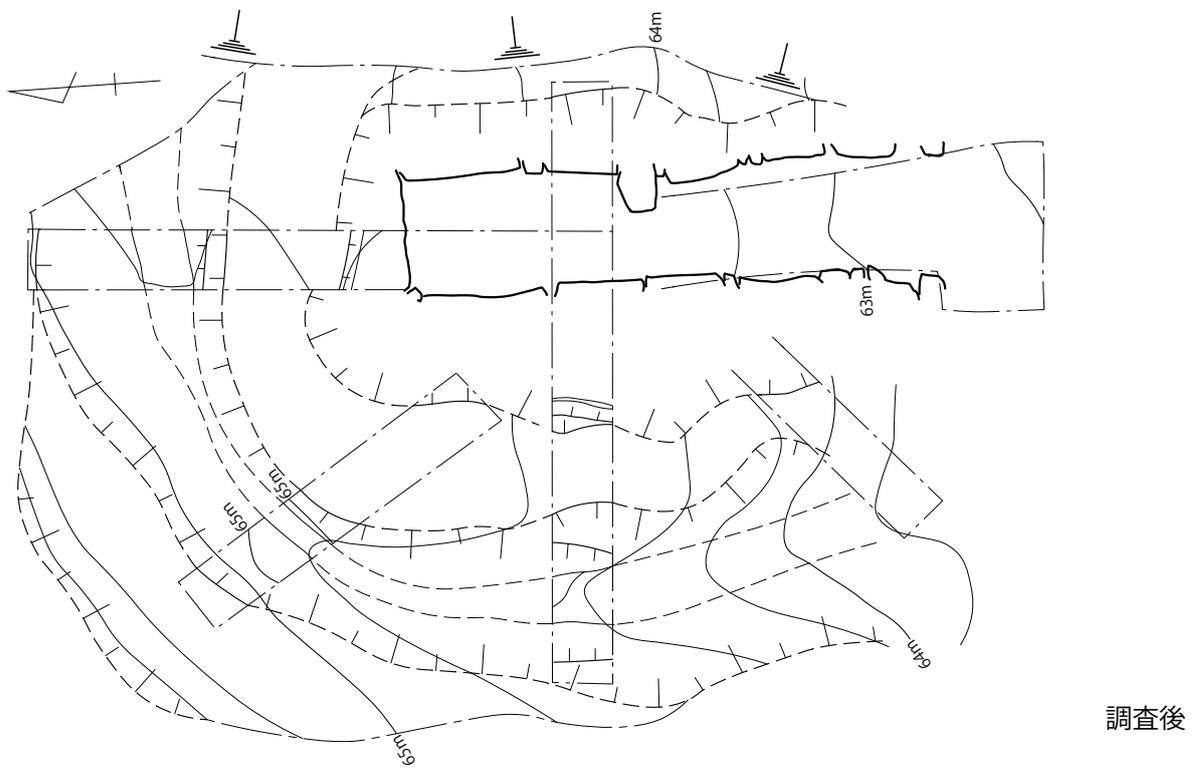
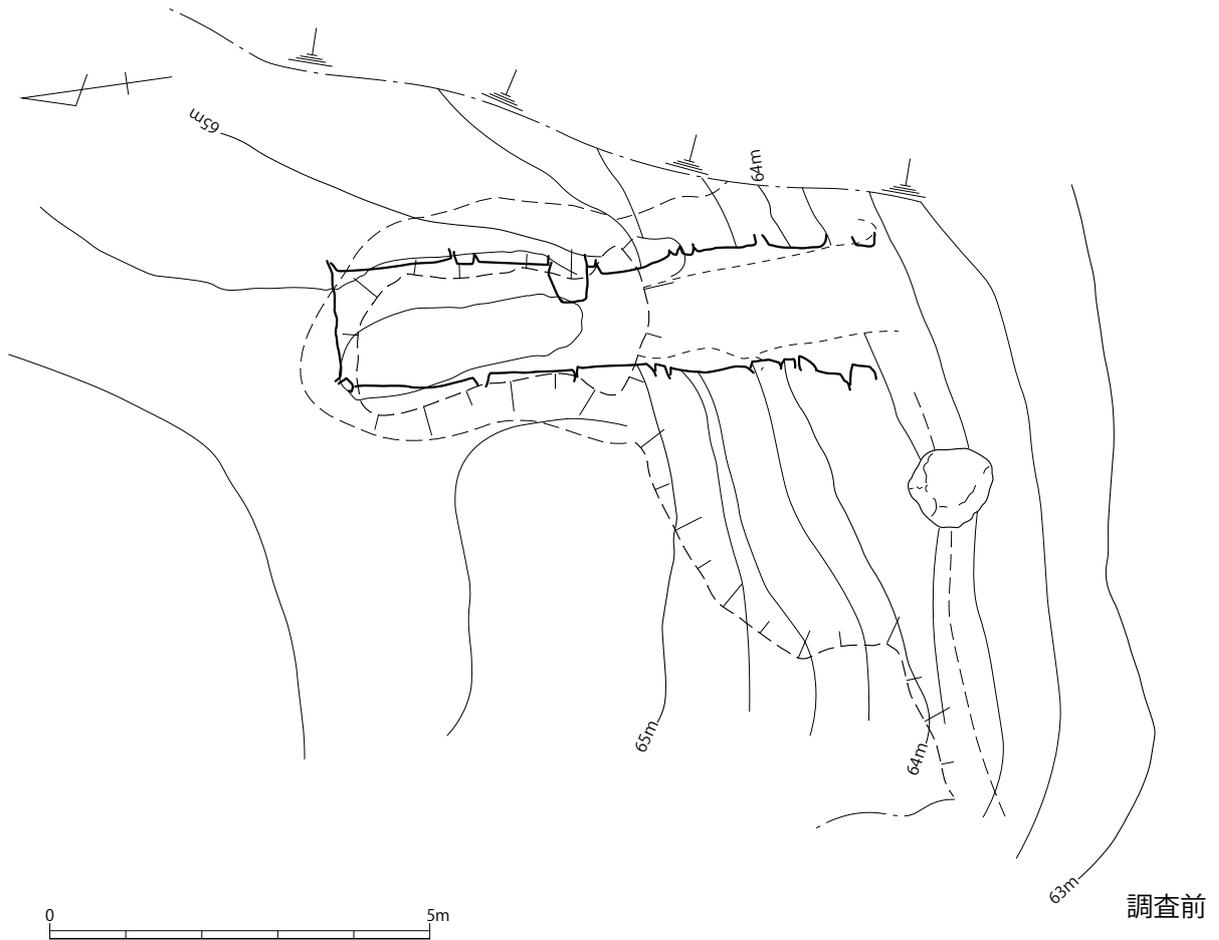
面横ナデを行っている。復元最大径 9.0cm。

28～33は須恵器平瓶または提瓶であろう。28はあまり開かずに立ち上がった器形となる。外面中位に一条の太い沈線を巡らせる。29は直線的に大きく開く口縁部となる。30は頸部が強く締まり、口縁部が大きく開いた器形となるようで、29に類似する。31は頸部が強く締まった器形として復元したが、径が小さ過ぎるかもしれない。肩部にはカキ目を施文する。32・33は壺の可能性もある。32は肩部にカキ目を施文しており、頸部は緩やかに外反するようである。33は外面にカキ目を行い、ヘラ記号を有している。

34～40は須恵器壺である。34は肩部に櫛状工具の連続刺突による綾杉文を施文する。35は肩部に一条の太い沈線を巡らせ、その上に工具の連続刺突による綾杉文を施文する。復元最大径 20.0cm。36は外面にカキ目を施文し、その後に二条の太い沈線を巡らせている。37～40は外面に強いナデ調整を行う壺である。37は体部中位よりやや上に太い二条の沈線が見える。下半はヘラケズリ調整を行う。復元最大径 15.0cm。38～40は接合しないが同一個体である。上方は横ナデ、下方はヘラケズリを行う。底部は丸みを帯びた不明瞭な平底となるようである。38は復元最大径 16.0cm、39は復元最大径 20.6cm、40は不明瞭だが底径 10.6cmに復元した。



第17図 11号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第18図 12号墳地形測量図 (1/100)

41～45は須恵器甕である。41は頸部から口縁部にかけて緩やかに開いた器形となり、口縁端部は内側に丸くつまみ出している。内外面横ナデ調整を行い、外面口縁部下には二条の沈線が見られる。口径13.0cm。42は口縁部が玉縁状に肥厚しており、上端部は尖る。43は上方に丸みを帯びて肥厚する。44は丸くわずかに肥厚する。焼成があまり良くない。45は外面に格子タタキ、内面に同心円当て具を行う胴部片である。

#### 土師器 (46～49)

46は土師器碗である。外面にはヘラミガキが確認される。内面の調整は不明。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用する。口径9.2cm。

47～49は土師器高坏で、同一個体であろう。47は風化が進んでいるが脚部内面には横方向のヘラケズリ状の痕跡が確認できる。48・49は脚部と裾部の内側に明瞭な稜線が見られる。

#### 陶磁器 (50～54)

50～52は青磁碗である。50は外面に鎬蓮弁を配している。釉色は青みの強い青緑色。51・52はカキ目を施文しており同一個体であろう。釉色は深緑色を呈する。

53・54は染付磁器である。53は丸みを帯びた形状の小碗で、青・緑色の文様を印判する。口径8.0cm、器高4.8cm。54は体部下半が直線的に伸びる器形の染付碗である。高台径6.6cm。

#### 鉄器 (図版15、第17図)

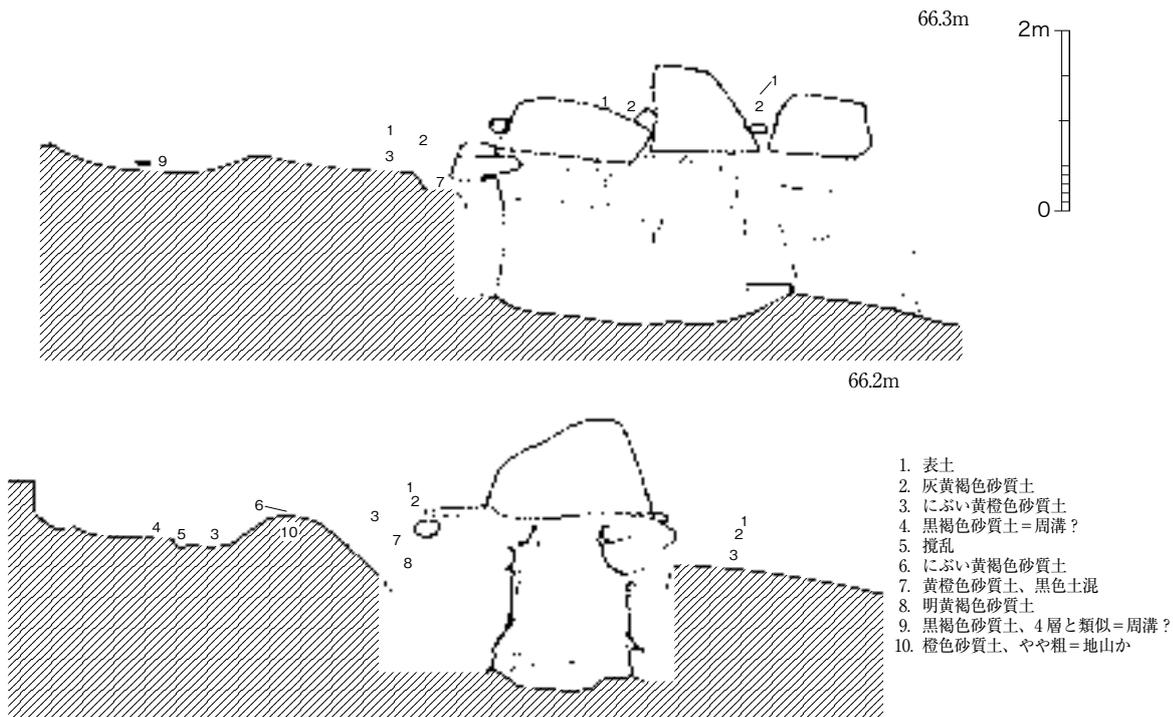
##### 鉄刀 (1)

1は鉄刀の茎部片で、二ヶ所に目釘穴が確認できる。幅1.7cm、厚さ0.6cm、重さ5.8g。

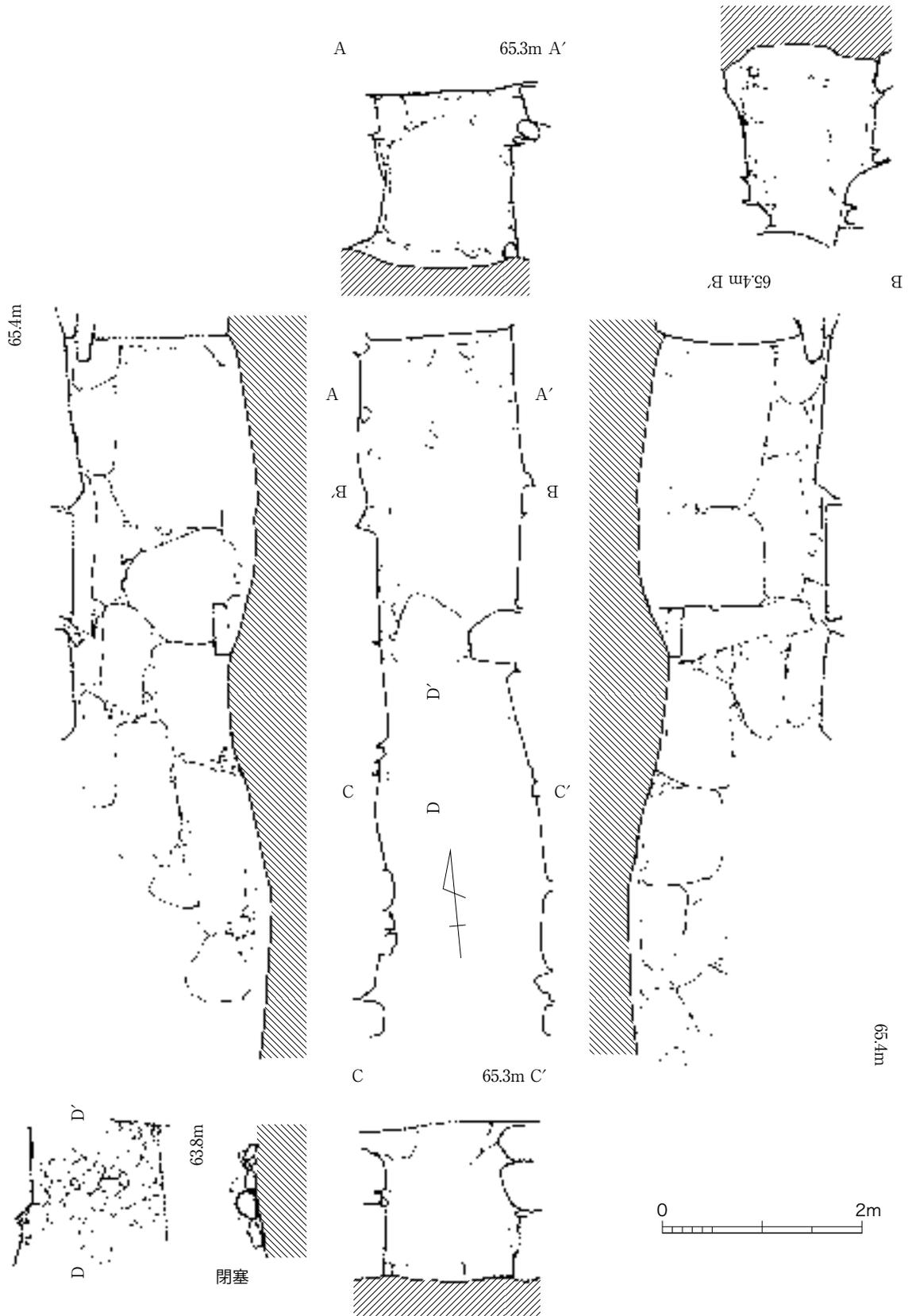
#### 12号墳

##### 墳丘 (図版7、第18・19図)

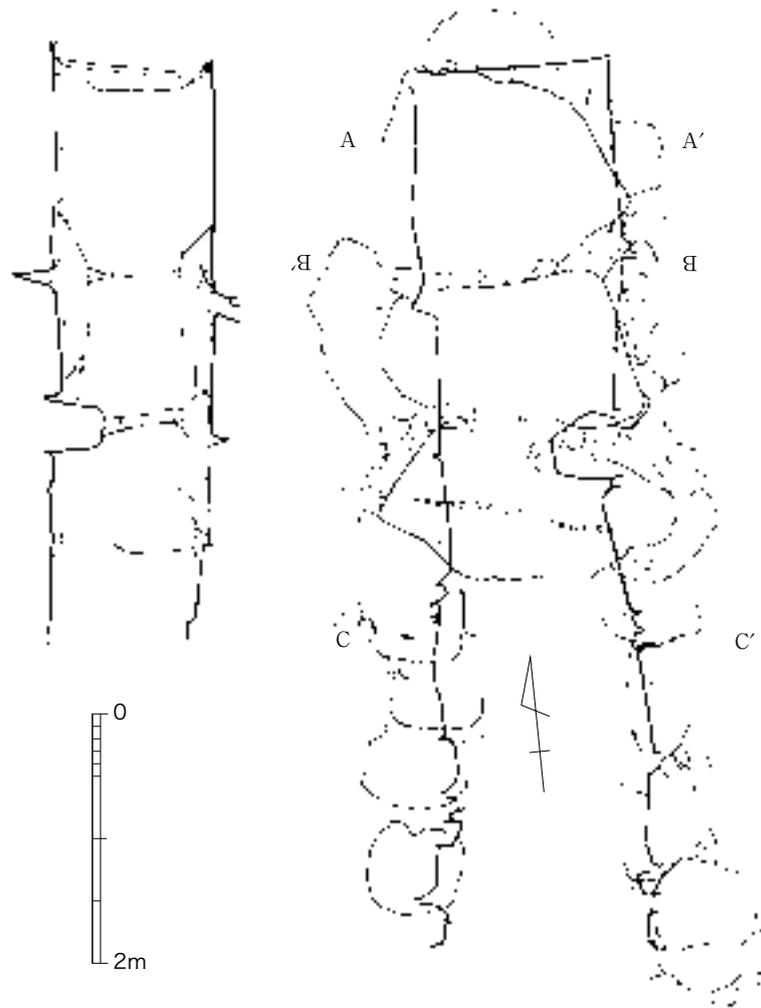
調査区の東側に位置する。規模は東側が後世の墳墓によって削られるものの、裾部分で7m、周溝含め12mほどになると考えられる。



第19図 12号墳墳丘実測図 (1/80)



第 20 図 12 号墳主体部・閉塞実測図① (1/60)



第21図 12号墳主体部実測図② (1/60)

前面の高さ2m、背面の高さ0.3mほどが残存する。周溝は幅2.5～3.0m、深さ0.5mで、東および南西部分では残存していない。墳丘はほとんど残存しておらず、調査前にもほとんどの天井石が露出した状態であった。3層のみが築造当時の盛土が残存しているものと考えられる。

主体部掘方は7.0×4.5m、深さ1.2mで、掘方の東側に寄って主体部が築かれる。

**主体部** (図版7・8、第20・21図)

#### 閉塞

径20cm弱の円礫を、羨門部にほぼ接する位置から0.8mほどの範囲で乱雑に積み、1段分が残存する。土器片が礫間からわずかに出土した。

#### 羨道・墓道

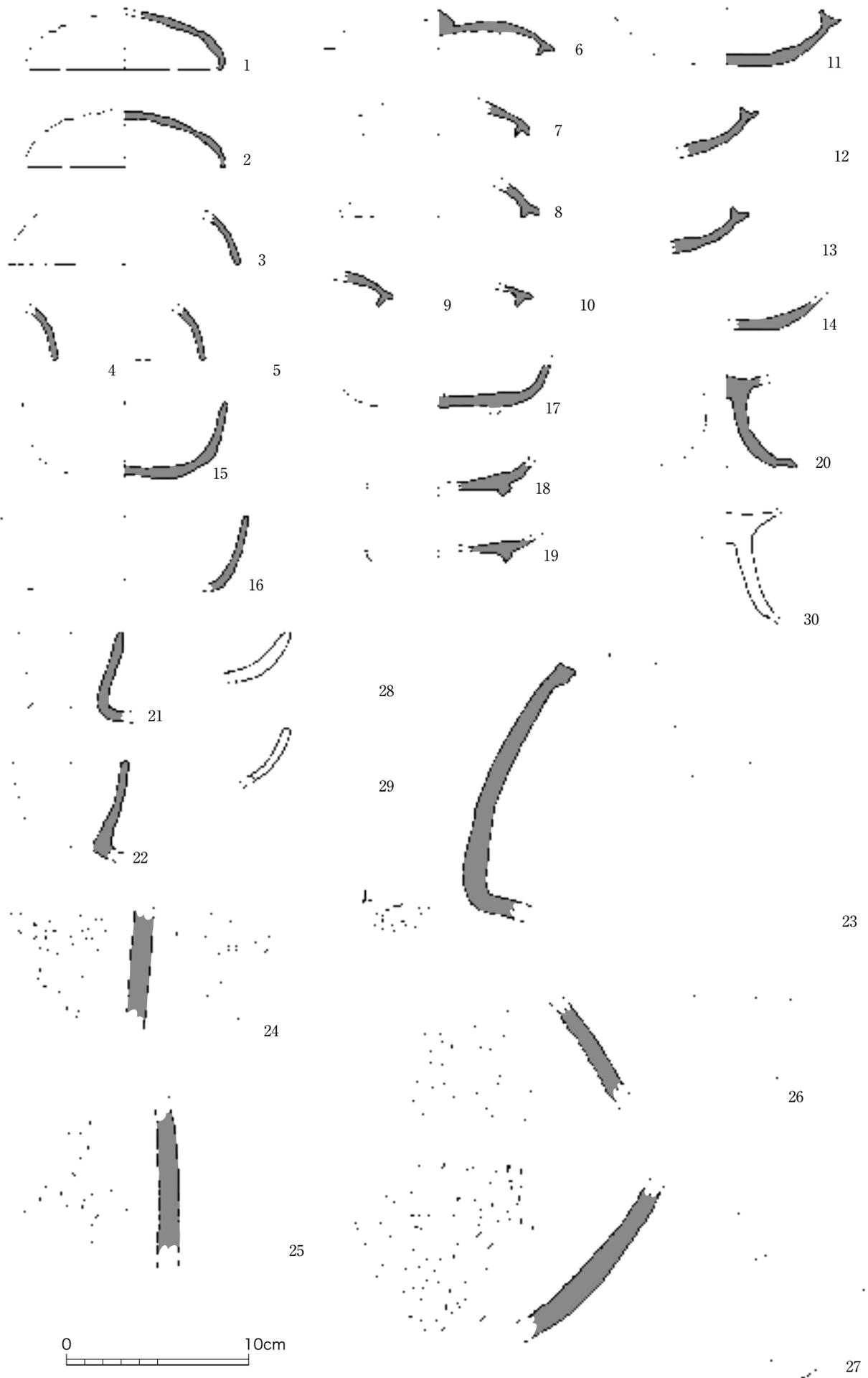
天上部が残存しないものの、墓道は長さ2m、幅1.6mほどと考えられる。羨道は長さ2.2m、幅1.2～1.6m、高さ1.5mを測る。

側壁は高さ0.7mほどの石を基底とする。床面にはほとんど敷石は残存しない。

#### 石室

規模は長さ2.7m、幅1.6m、高さ1.5mで、単室の横穴式石室である。

奥壁は1枚の石を用い、その上部に幅0.3mの板石を0.25mほど突出させて設置する。側壁は1m前後の石の上部に、0.3～0.5m幅の石を設置する。玄室中央部では、持ち送りが認められ、天



第22图 12号墳出土土器実測図(1/3)

井部の幅が0.5mほどとなる。

玄関は右側にのみ立石を設置して片袖状を呈し、0.55mの突出が認められる。框石は0.7mの板石を置き、左側には隙間を埋めるように小礫が配置される。

天井石は幅1.0～1.5mの石が3枚残存し、前面の天井石上面には後世の矢痕が認められる。石材はほとんどが花崗岩を用いており、側壁の間に詰める一石のみ凝灰岩系の石材が用いられる。

床面は盗掘時に大きく掘り込まれており、ほとんど残存していない。

遺物は左側壁の端から出土している。

#### 出土土器（図版15・16、第22図）

##### 須恵器（1～27）

1～10は須恵器蓋である。1は口縁端部が短く内傾する。口径10.4cm。2は端部が真下を向く。口径10.6cm、器高3.2cm。3～5は口縁部上方に不明瞭な沈線状の段を巡らせる。3は口径12.6cm。

6～10は端部内面にかえりを有した蓋である。6は断面三角形状の低い撮部を貼付する。口径12.6cm、器高2.4cm。7～10は短いかえりを有したもので、坏身片の可能性もある。7は口径10.0cm、8は口径11.0cm。

11～14は短い立ち上がりを有した坏身で、蓋の可能性もある。11は口径10.2cm、器高3.1cm。12・13は断面三角形状の短い立ち上がりを有す。14は丸みの少ない坏底部片である。

15は無高台の椀である。口縁部があまり開かず直線的に上方に伸びる形状で、下半には一条の沈線を巡らせるようである。口径11.2cm、器高4.2cm。16は体部がわずかに丸みを帯びており、あまり開かず伸びる。高台の有無は不明。口径13.4cm。

17～19は高台付椀である。17は体部と底部の境が丸く不明瞭な形状で、高台はかなり内側に貼付されるが剥離している。18・19は高台内端部が尖っており、その部分で接地する。18は高台径6.8cm、19は高台径7.2cm。

20は低脚の須恵器高坏である。柱部中央に幅の広い一条の沈線を巡らせており、裾部は大きく開いて端部は下方に鋭く屈曲する。裾部径7.0cm。

21・22は須恵器平瓶等の口縁部である。どちらも頸部付け根から口縁部まであまり開かず内湾気味に立ち上がる。調整は内外面横ナデ。21は口径5.6cm、22は口径6.4cm。

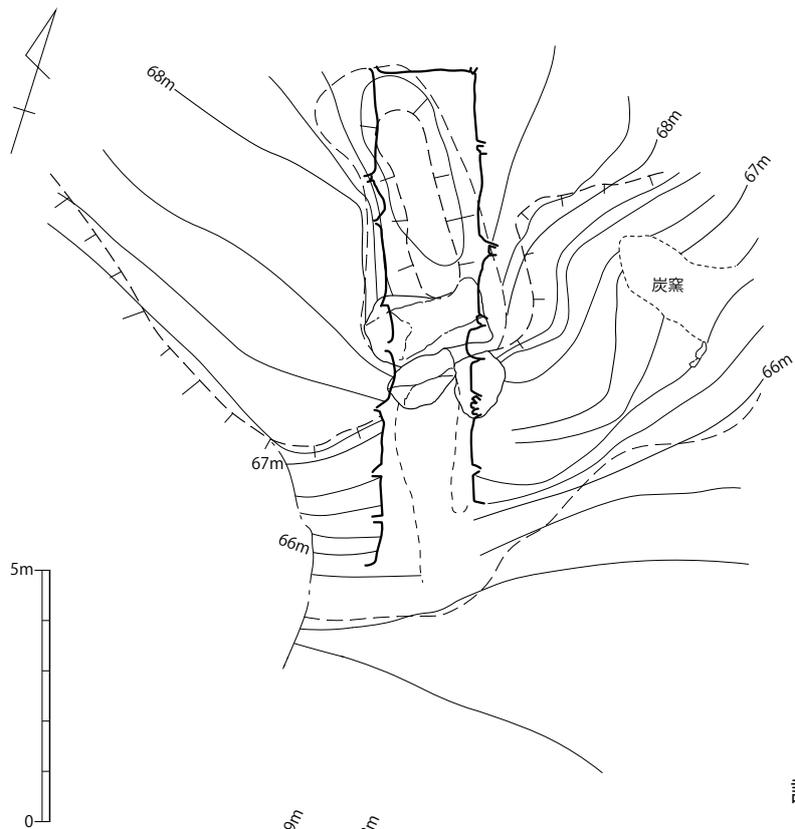
23～27は須恵器甕である。23は口縁部下半が上方へと伸び、上半は緩やかに開いた器形となる。口縁端部は外側へと肥厚させており、上端が面をなす。外面口縁部下には二条の沈線と、その間に斜方向の平行沈線をヘラ描きで施文する。口縁部内面は横ナデ、体部には同心円当て具を行っている。24～27は外面に格子タタキ、内面に同心円当て具痕がある。どれも調整面では類似するが、色調からみて少なくとも25・26は同一個体であろう。

## 13号墳

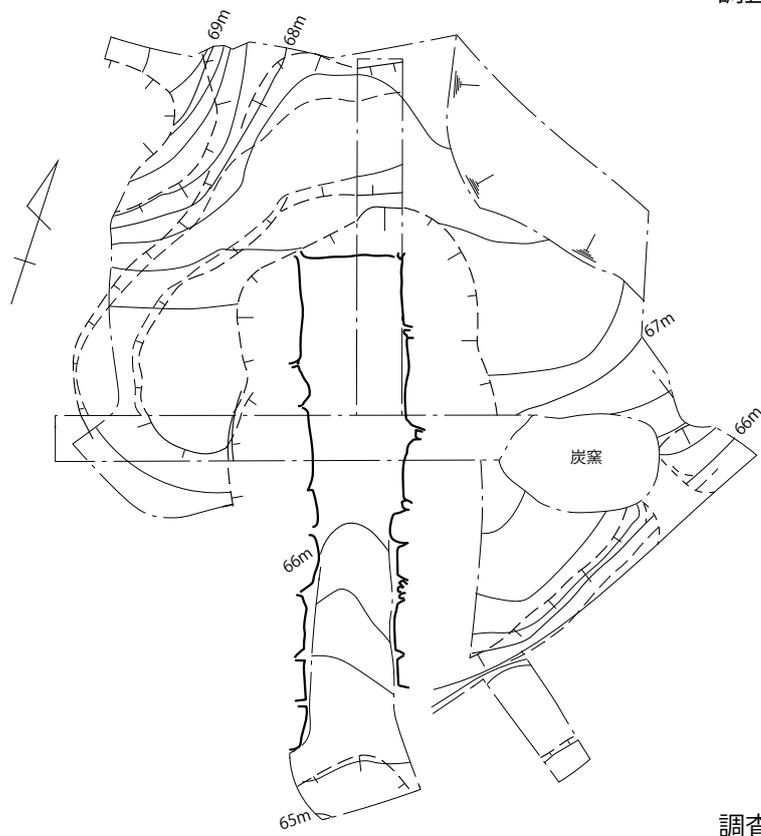
### 墳丘（図版9、第23・24図）

調査区の中央やや北よりに位置する。墳丘東側が炭窯および攪乱に切られる。規模は東側が明らかではないものの、裾部分で9.5m、周溝含め12mほどになると考えられる。

前面の高さ3m、背面の高さ0.8mほどが残存する。周溝は幅1.3～2.5m、深さ0.2～0.9mで、東部分は攪乱に切られ残存していない。

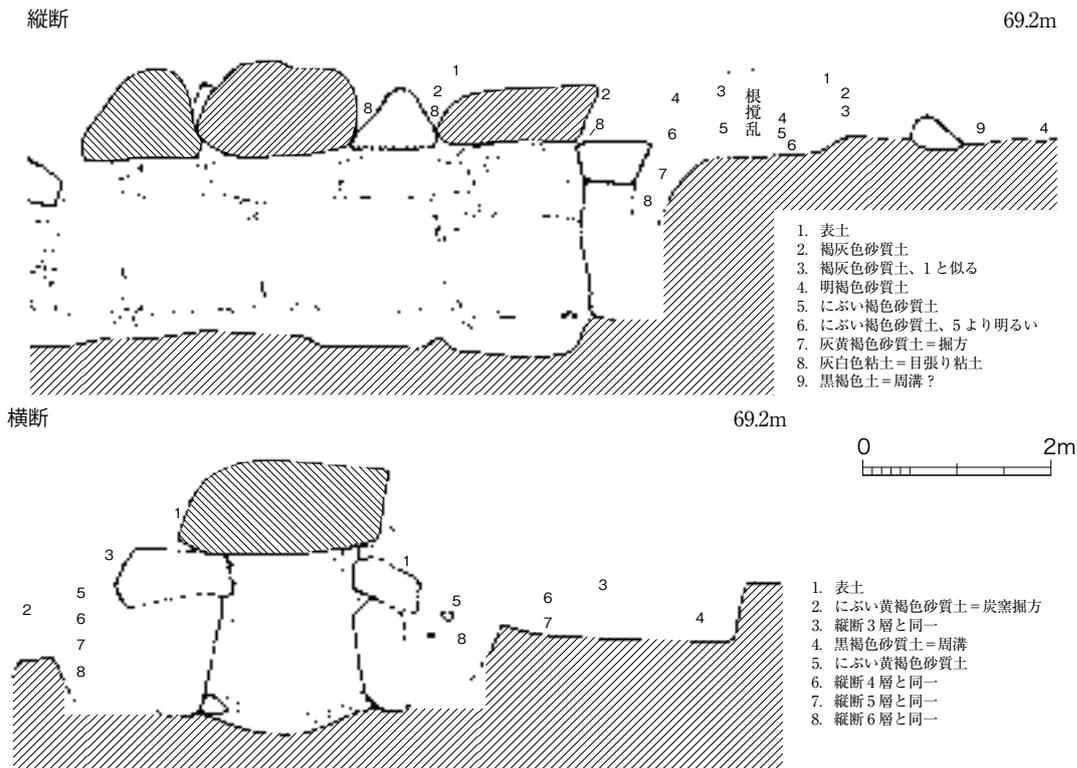


調査前



調査後

第 23 図 13 号墳地形測量図 (1/150)



第24図 13号墳墳丘実測図 (1/80)

墳丘は西側を除いてほとんど残存しておらず、西側も急斜面に接しているため、詳細は明らかでない。主体部掘方は9×5m、深さ1mで、掘方の東側にやや寄って主体部が築かれる。

**主体部** (図版9・10、第25・26図)

**閉塞**

開口していたため、閉塞石は残存していなかった。前門の手前にわずかに、径0.2m程の小礫が残る。

**羨道・墓道**

墓道は長さ2.8m、幅1.7m、羨道は長さ1.8m、幅1.6mほどと考えられる。羨道側壁は高さ0.8mほどの石を2つ積み重ねる。

床面にはほとんど敷石は残存しない。

**石室**

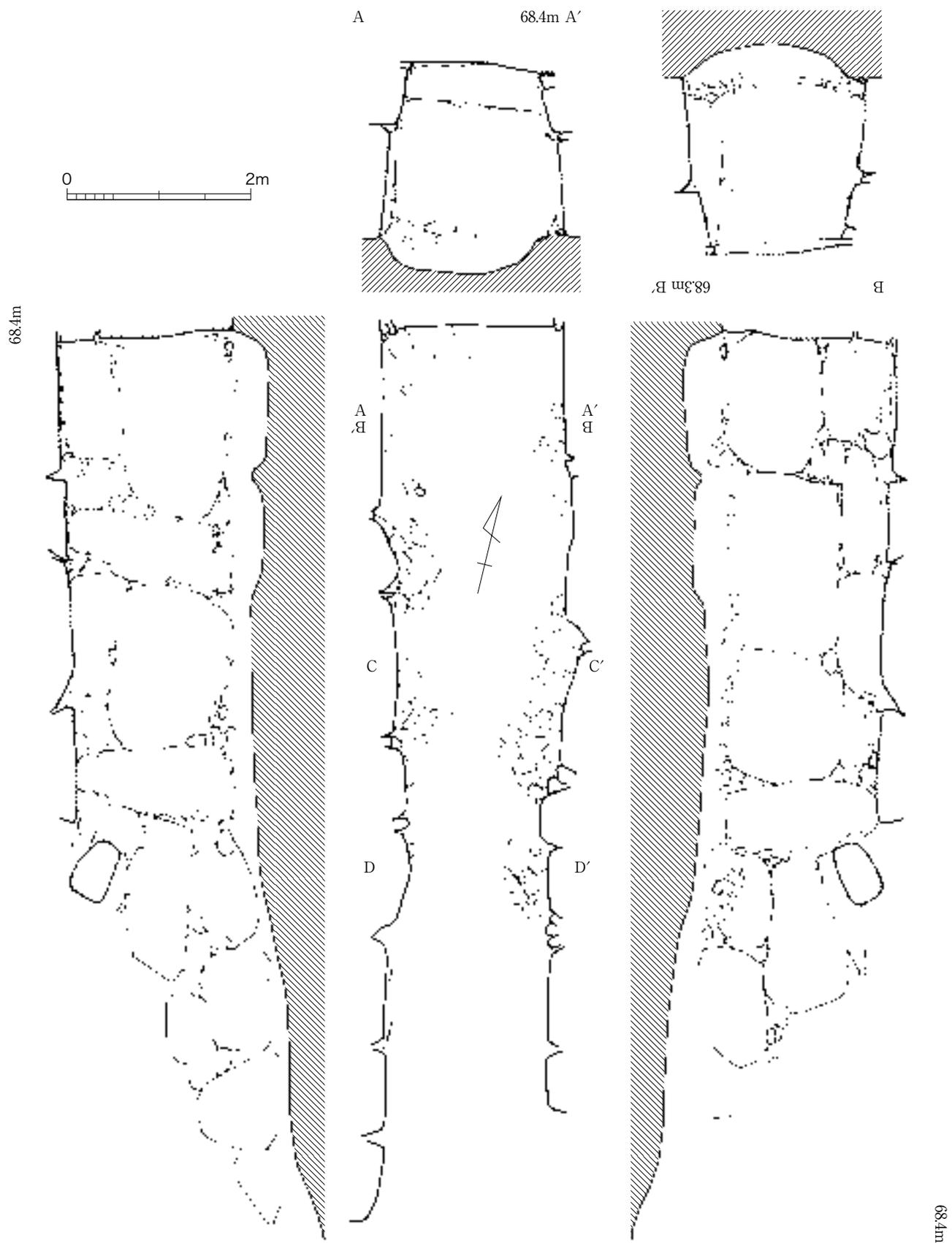
規模は長さ5m、幅2.1m、高さ1.9mを測る。左側壁は中央に立石が認められ、複室状の構造をなすものの右側壁には認められず、単室の横穴式石室である。

奥壁は1.8×1.6mの石を立て、その上部に幅0.4mの石を積み重ねる。側壁は2枚の石をやや内傾させ、持ち送り状に積み重ねる。天井と床面の幅の差は0.2m程である。

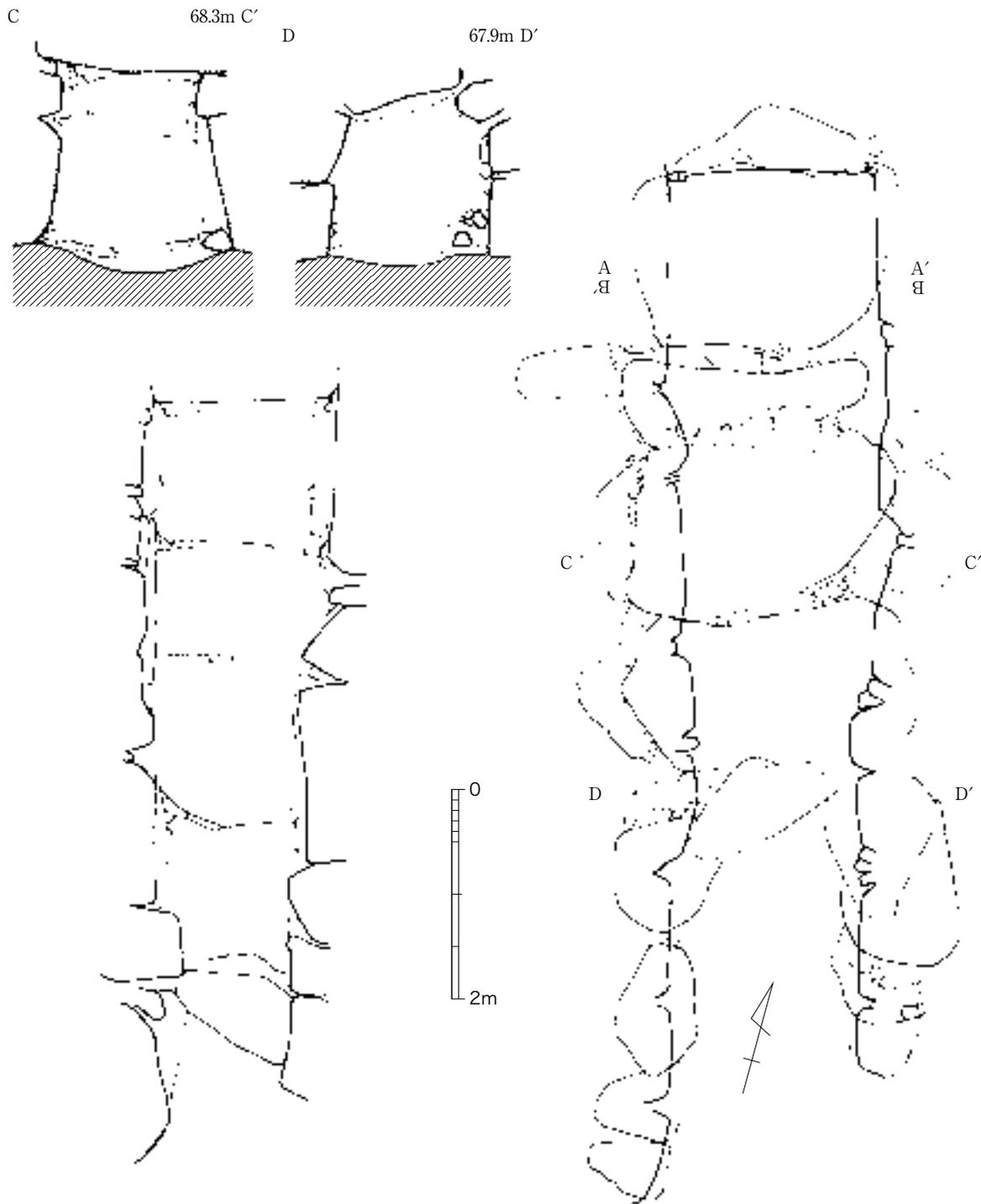
玄門は石を立てて構築されるものの、右側に0.2mの突出が認められるのみである。幅1.4m、高さ1.4mである。天井石は幅0.8～1.6mの石が4枚残存する。羨道側の天井石は高さ・位置共にずれており、原位置を保っていないものと考えられる。

石材はほとんど花崗岩を用いており、間に詰める小礫に一石のみ凝灰岩系の石材が用いられる。床面は盗掘時に大きく掘り込まれており、ほとんど残存していない。

遺物は左側壁の端から出土している。



第 25 图 13 号墳主体部実測图① (1/60)



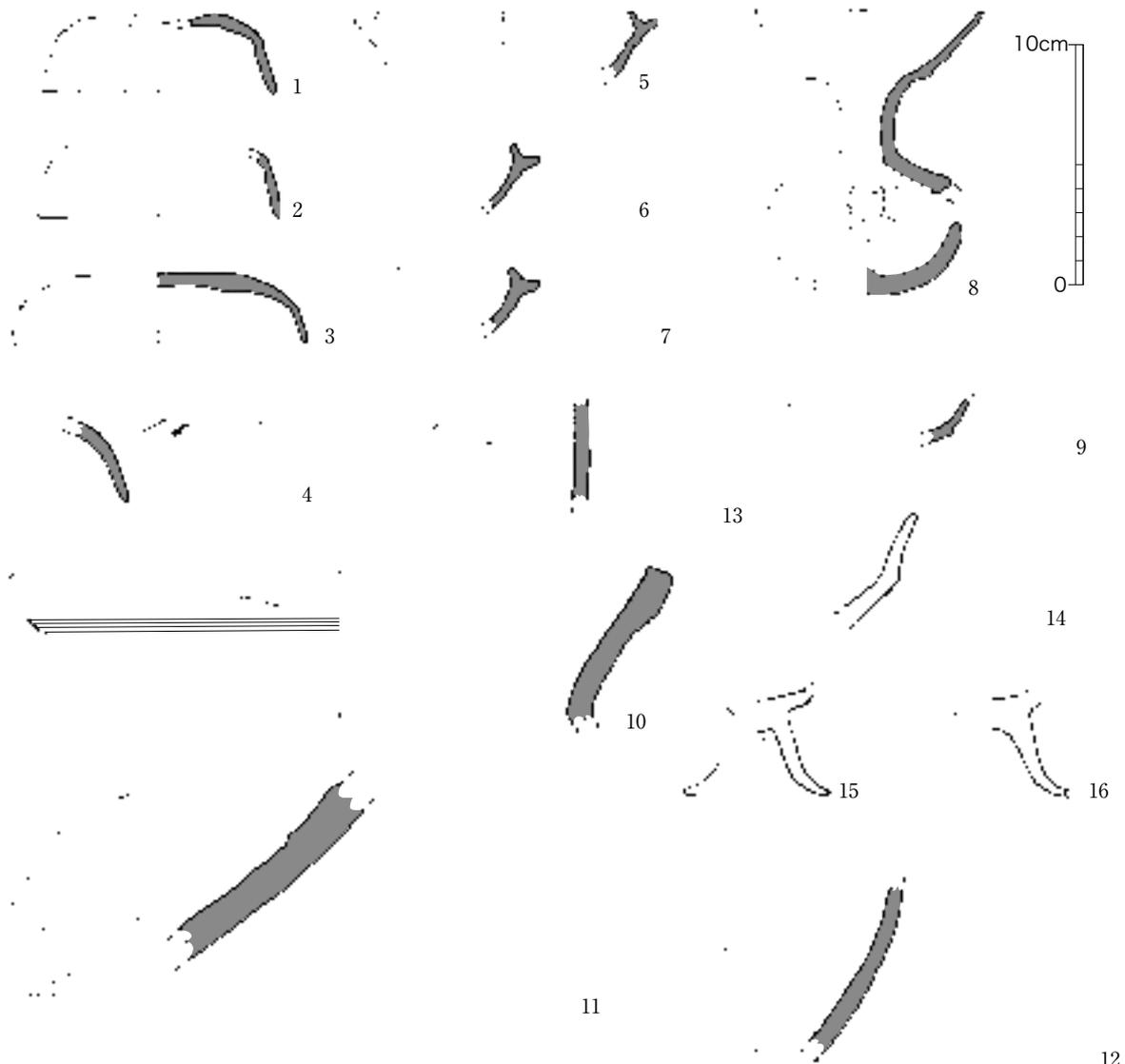
第26図 13号墳主体部実測図② (1/60)

**出土土器** (図版16、第27図)

**須恵器** (1～13)

1～4は須恵器蓋である。1・2は口径が小さく器高が高い形状であるため短頸壺の蓋だと思われる。1は口径9.6cm、器高3.4cm。2は口径10.0cm。3は丸みを有しているが低平な器形の坏蓋である。口径12.2cm、器高3.0cm。4は外面に櫛状工具で斜め方向に刺突文を連続施文しており、壺等の蓋であろう。

5～7は内面に立ち上がりをもった坏である。比較的深い器形となることから全て坏身として図示した。5は口径12.6cm。7は他と比較して器壁がやや厚い。外面には横ナデに先行するハケ目が



第27図 13号墳出土土器実測図(1/3)

12

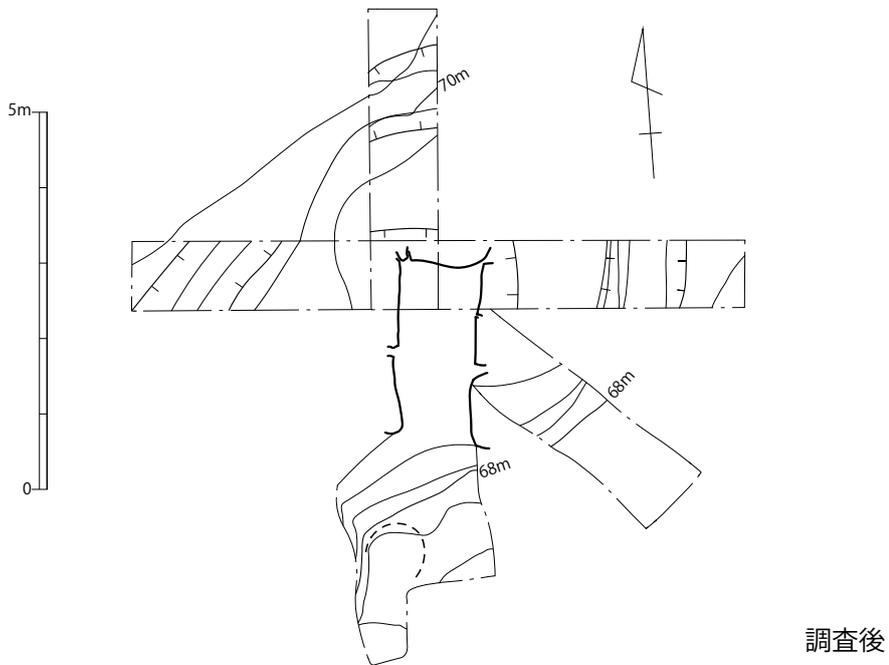
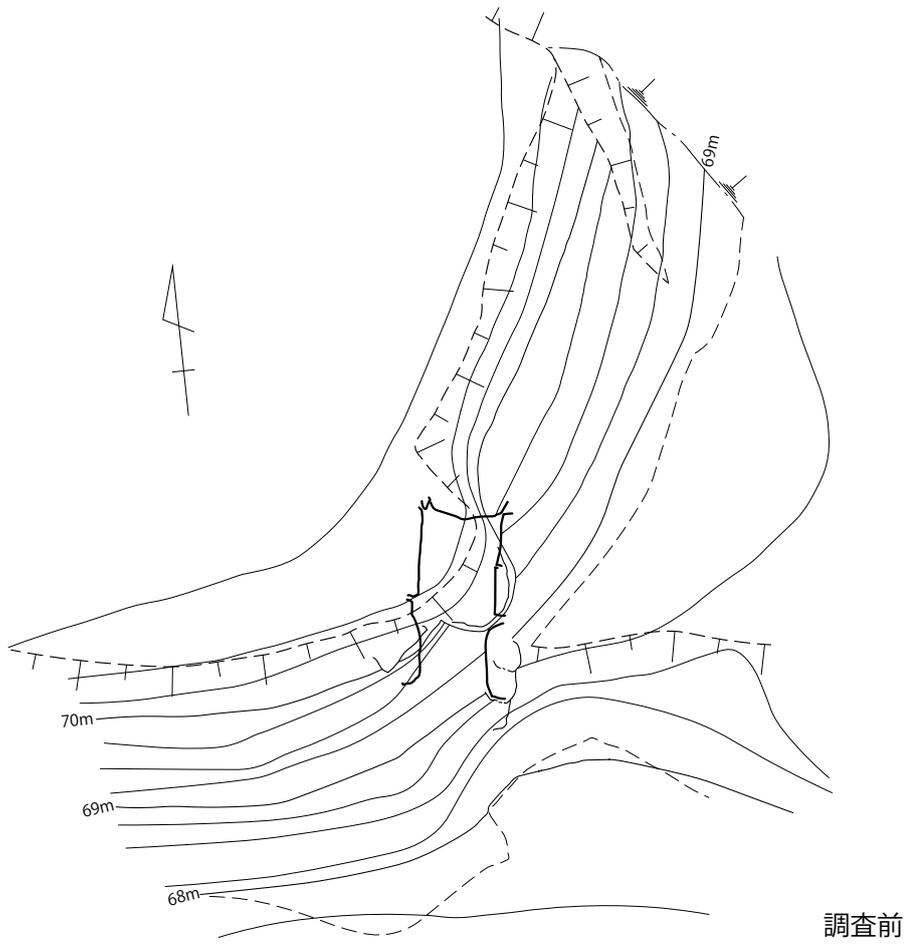
認められる。

8・9は須恵器甕である。8は完形に復元できる個体。体部は最大径が中位よりやや上にあり、肩部は強く締まる。頸部は細く、口縁部は大きく開く。体部最大径の位置と頸部にはそれぞれ一条の沈線を巡らせる。体部下半はヘラケズリ、それ以外はナデ調整を行う。口径9.2cm、器高11.9cm。9は明瞭な段を有した小片であり、甕の口縁部片として図示した。

10～13は須恵器甕である。10は端部が四角く肥厚する甕口縁部である。口径27.2cm。内外面横ナデ調整を行う。11は外面平行タタキ、内面同心円当て具を行う。12・13は外面に単位の短い平行タタキを行っており、外面の色調は異なるが内面の色調や調整の共通性から同一個体として良いだろう。

#### 土師器(14～16)

14～16は土師器高坏である。14は口縁部が短く外反する器形で、外面にはハケ目がかすかに認められる。15・16は低脚の高坏脚部である。脚裾部は短く開いており、器壁は薄くなる。外面には縦方向の稜線が確認できる。15は裾部径6.2cm。



第 28 図 14 号墳地形測量図 (1/100)

## 14号墳

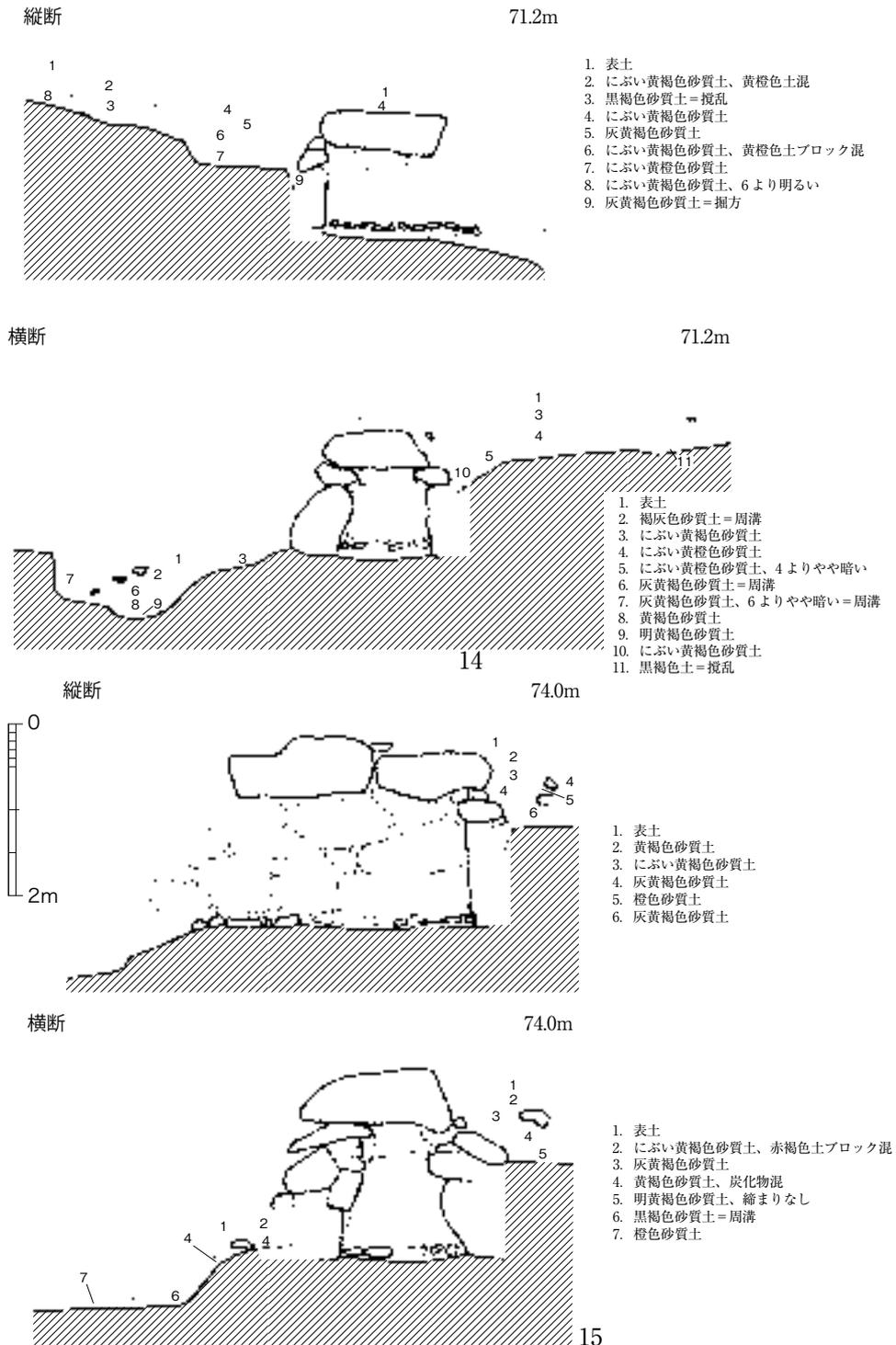
### 墳丘（図版 11、第 28・29 図）

調査区の北西側に位置する。規模は裾部分で 5m、周溝含め 7.5m ほどになると考えられる。

前面の高さ 1.5m、背面の高さ 0.4m ほどが残存する。周溝は幅 1m 前後、深さ 0.2～0.8m で、南東側は 13 号墳の周溝と重なる。

墳丘は北側と東側で残存するが、西側は削平のためほとんど残存しない。

主体部掘方は 2.2 × 2.0m、深さ 1m で、東側では掘方のラインが確認できなかった。西側に寄せ



第 29 図 14・15 号墳墳丘実測図 (1/80)

て主体部を構築した後、東側には墳丘のみを積んだものと考えられる。

### 主体部（図版 11、第 30 図）

#### 閉塞

径 0.2～0.4m の小礫を玄門部から幅 0.6m の範囲で乱雑に積み、高さ 0.5m 分が残存する。上部には右袖から落ちたと考えられる石が乗っており、一部は閉塞に伴うものではない可能性がある。

#### 羨道・墓道

墓道は 13 号墳の周溝と接するため認められず、羨道は長さ 1m、幅 0.9m ほどと考えられる。

羨道側壁は高さ 0.4～0.6m ほどの石を 2 つないしは 3 つ積み重ねる。

敷石は玄門から 0.8m の範囲で残存していた。

#### 石室

規模は長さ 1.4m、幅 1m、高さ 1.1m を測り、小型で単室の横穴式石室である。

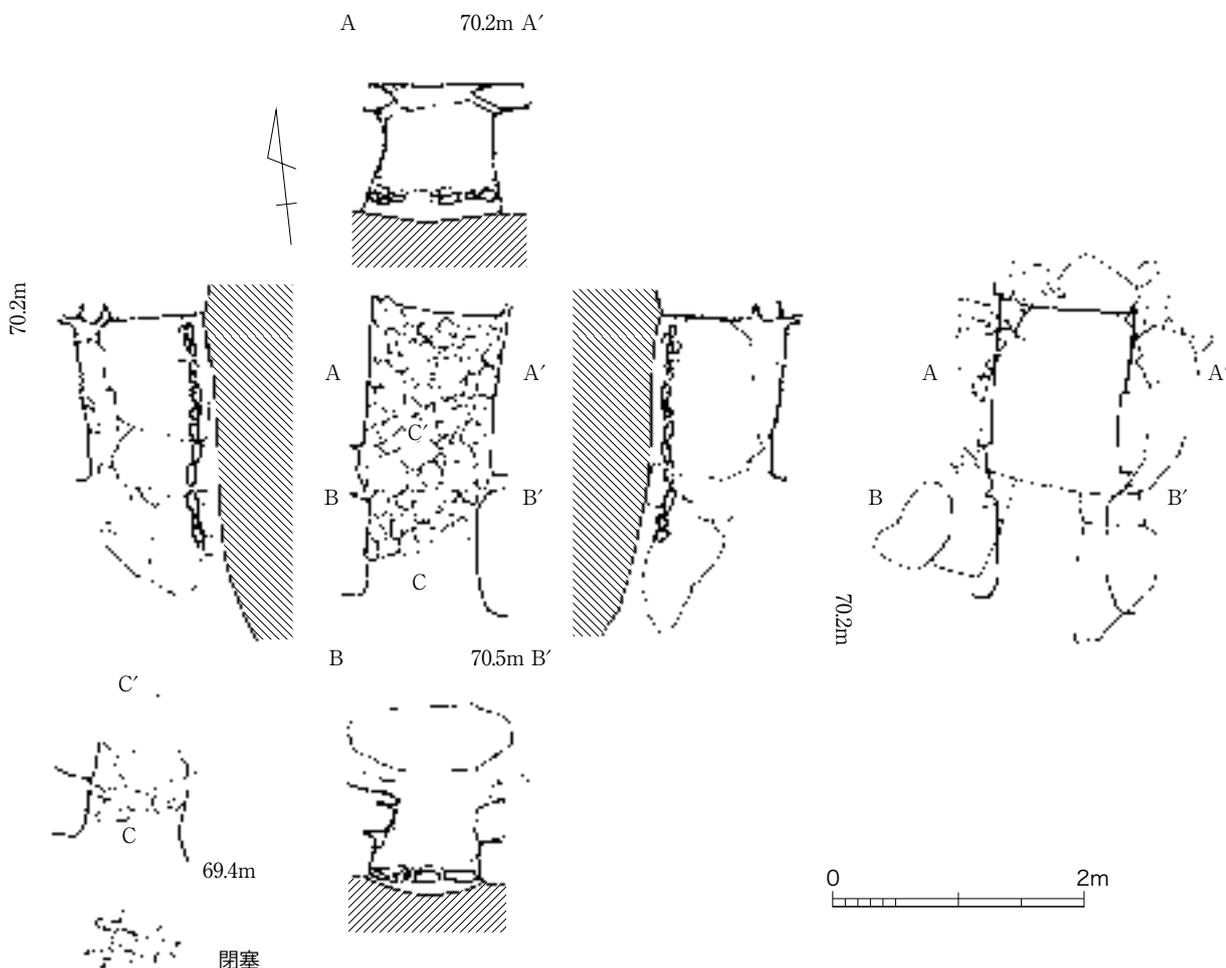
奥壁は 0.9 × 0.7m、側壁は 1.0～1.3m、高さ 0.8m の石を使用する。側壁の 2 石めに立石が認められることから、この部分が玄門と考えられる。玄門幅 1m、高さ 1m である。

天井石は幅 1.2m の石が 1 枚残存する。敷石は全体に径 0.2～0.3m ほどの礫が敷き詰められていた。石材はほとんど花崗岩を用いており、敷石に 1 石のみ凝灰岩系の石材が用いられる。

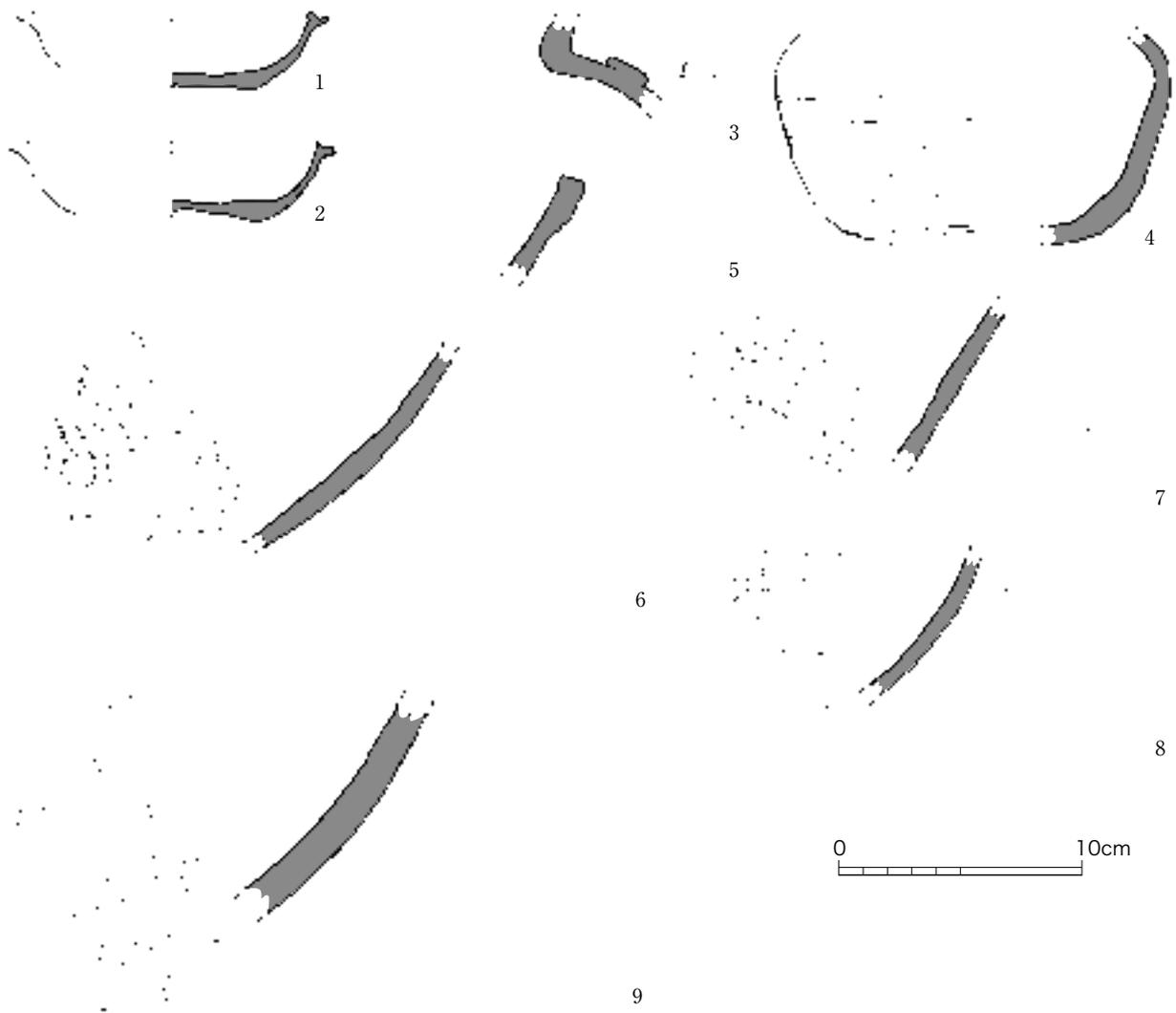
遺物出土量は少ない。本調査区で最小の石室である。

### 出土土器（図版 16・17、第 31 図）

#### 須恵器（1～9）



第 30 図 14 号墳主体部・閉塞実測図（1/60）



第31図 14号墳出土土器実測図(1/3)

1・2は口縁部内面に短い立ち上がりを有した須恵器坏である。立ち上がりは低くて短い、体部は比較的深みがある。両者はよく似た器形だが接合しない別個体である。1は口径11.2cm、器高3.3cm。2は口径10.6cm、器高3.2cm。

3・4は提瓶であろう。3は肩部片である。外面に小さな円盤状の粘土貼付を行う。4は体部上半に最大径がある。外面は全面にカキ目を行った後で下半にヘラケズリを行っている。体部最大径16.2cm。

5～9は須恵器甕である。5は口縁部を四角形に肥厚させており、13号墳出土の第27図10と同一個体と思われる。6～9は外面に単位の短い平行タタキを行う体部片で、6と8は色調や内面当て具の共通性から同一個体とみて良いものと思われる。9は他と比較して器壁がやや厚い。

## 15号墳

墳丘(図版12、第29・32図)

調査区の北西端に位置する。

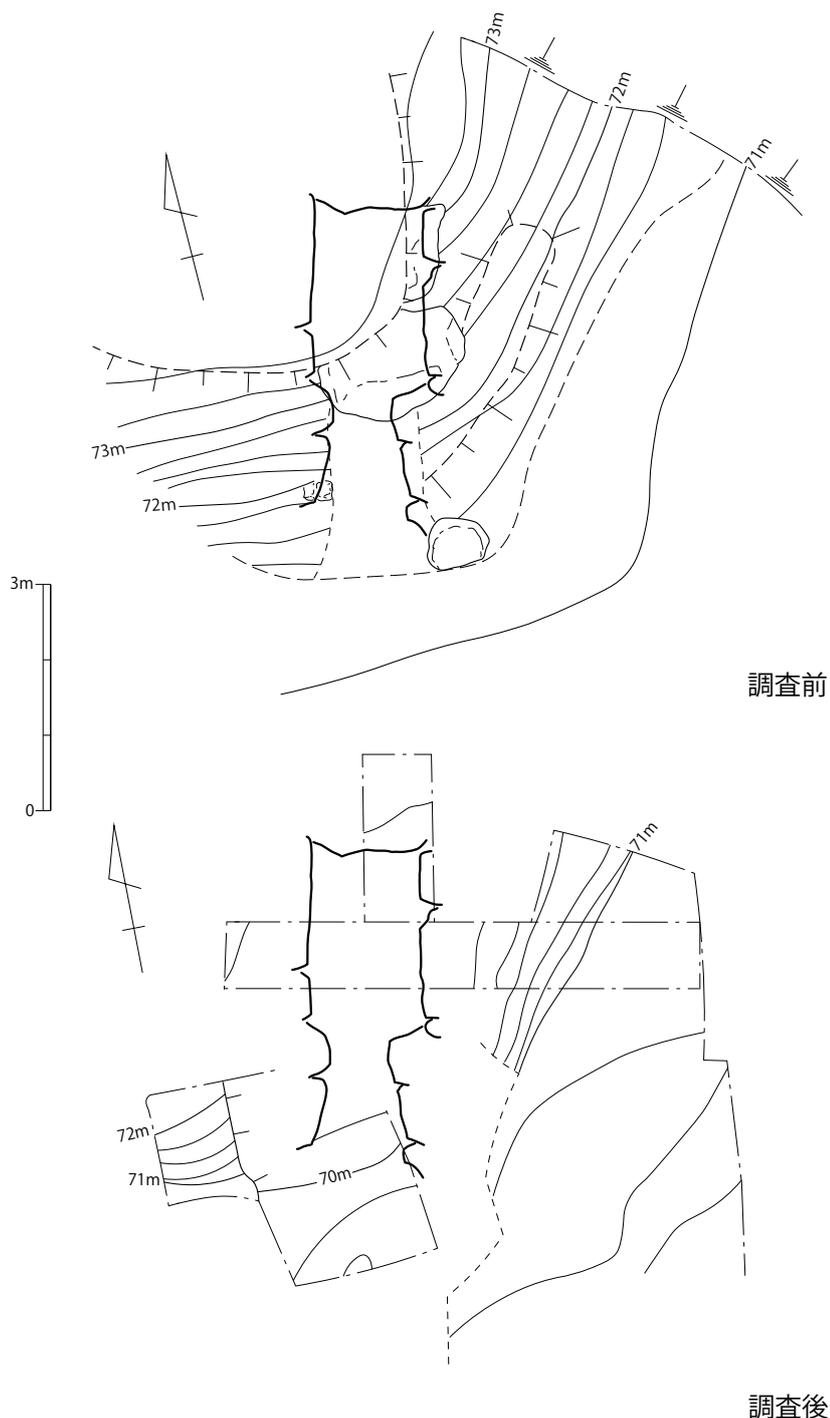
北側と西側のトレンチでは、人頭大の礫が多く認められ、調査区端が近かったことから地山まで

掘削できていない。

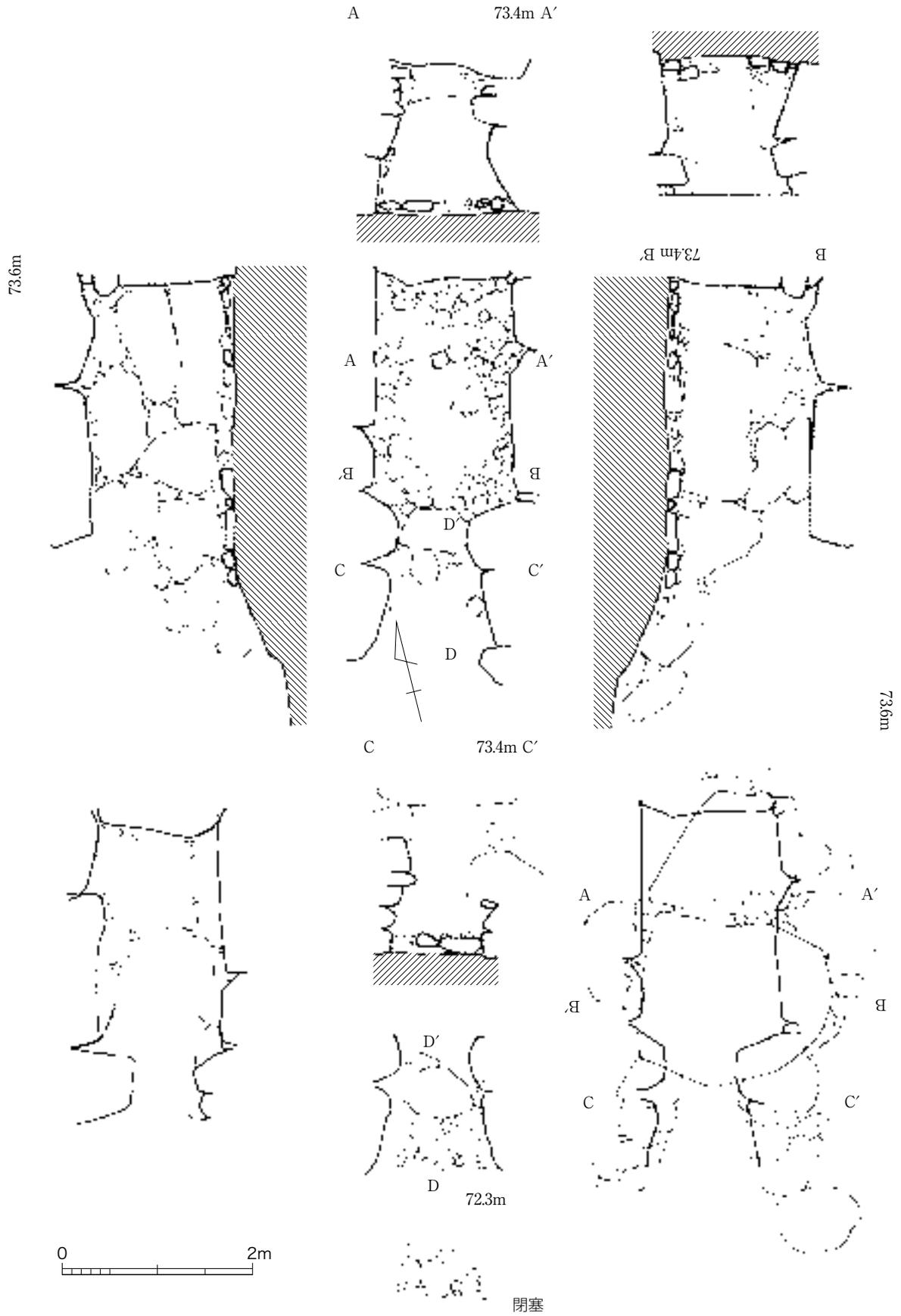
規模は裾部分で4m、周溝含め6mほどになると考えられる。前面の高さ2m、背面の高さ0.1mほどが残存する。

周溝は北および西側が検出できず、東側でも平面状では明確に確認できなかった。土層から考えれば幅0.8m、深さ0.2mの6層になると考えられる。

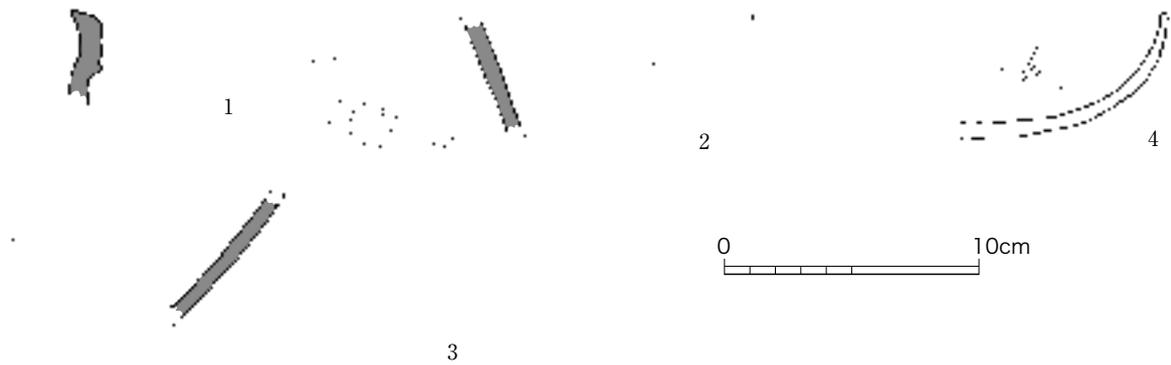
墳丘はほとんど残存せず、土層からすれば東側および北側にわずかに残る程度と考えられる。主体部掘方も平面ではほとんど確認できなかったが、石室前面西側で確認したものから考えると、4m前後で深さ1mほどになると考えられる。



第32図 15号墳地形測量図 (1/100)



第33図 15号墳主体部・閉塞実測図 (1/60)



第34図 15号墳出土土器実測図(1/3)

**主体部** (図版12、第33図)

**閉塞**

径0.2～0.4mの小礫を玄門部から幅1.2mの範囲で乱雑に積み、高さ0.6m分が残存する。

**羨道・墓道**

小石室のため羨道と墓道の区別が明らかでなく、共に合わせて長さ1m、幅0.6～1.2mと考えられる。側壁は高さ0.4mほどの石を3段以上積み重ねる。

敷石は玄門近くに径0.3mほどの石がわずかに残るのみである。

**石室**

規模は長さ2.4m、幅1.3m、高さ1.5mを測り、小型で単室の横穴式石室である。奥壁は1.2×1.2mの石を立て、その上部に幅0.3mの石を積み重ねる。

側壁は1.0～1.4m、高さ0.6mほどの石を3段ほど積み重ねる。玄門は幅0.6m、高さ1.4mである。玄室と羨道・墓道の幅に明確に差異がある唯一の例となる。

框石は幅0.7mの板石を置く。天井石は幅1.3～1.8mの石が2枚残存する。

敷石は中央部が一部破壊されているものの、全体に径0.1～0.3mほどの礫が敷き詰められている。

石材はほとんど花崗岩を用いており、側壁の間に詰める石や敷石の一部にわずかに凝灰岩系の石材が用いられる。

遺物は玄門の後ろで第34図4の土師器碗が出土している。

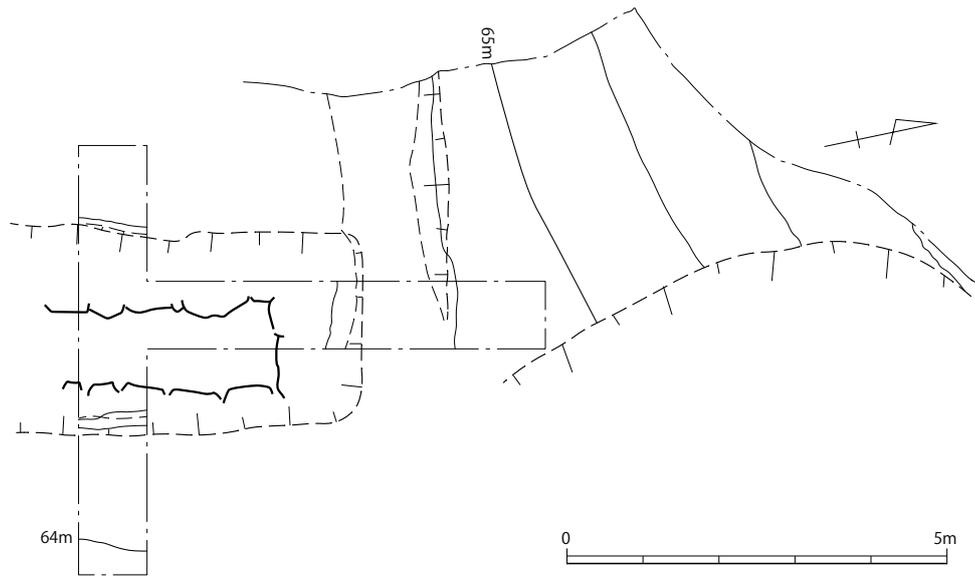
**出土土器** (図版17、第34図)

**須恵器** (1～3)

1～3は須恵器甕である。1は小片のため傾きは不明。内端部がわずかに内側に伸びており、全体的に四角く肥厚したような形状となる。2・3は外面に短い単位の平行タタキ、内面に同心円当て具痕が認められる。

**土師器** (4)

4は土師器碗で、ほぼ完形に復元できた。底部から体部にかけて浅く丸味を帯びた形状となり、口縁部は上方を向く。内面には放射状の暗文が認められる。外面の下半部には短い単位のヘラケズリが認められるが上半部は不明。口径16.2cm、器高4.9cm。



第 35 図 17 号墳地形測量図 (1/100)

## 17 号墳

### 墳丘 (図版 13、第 35・36 図)

調査区の中央に位置し、調査開始当初は認識していなかった。

周溝等は確認できず、規模は他の古墳との関係から墳丘の規模は直径 6m ほどになると考えられる。墳丘自体もほとんど確認できず、北側土層で確認した 1 層が周溝埋土であった場合、5 層のみが盛土となる。

周溝は先に述べた土層以外では確認できず、西側は谷、東側は 12 号墳と接していたため掘削されていない可能性が考えられる。土層から考えれば幅 1m、深さ 0.1m の周溝が北側に残存していた可能性がある。

主体部掘方は 5.0 × 2.5m、深さ 0.6m で、西側では掘方のラインが確認できなかった。

### 主体部 (図版 13・14、第 36 図)

#### 閉塞

閉塞石は確認できなかった。

#### 羨道・墓道

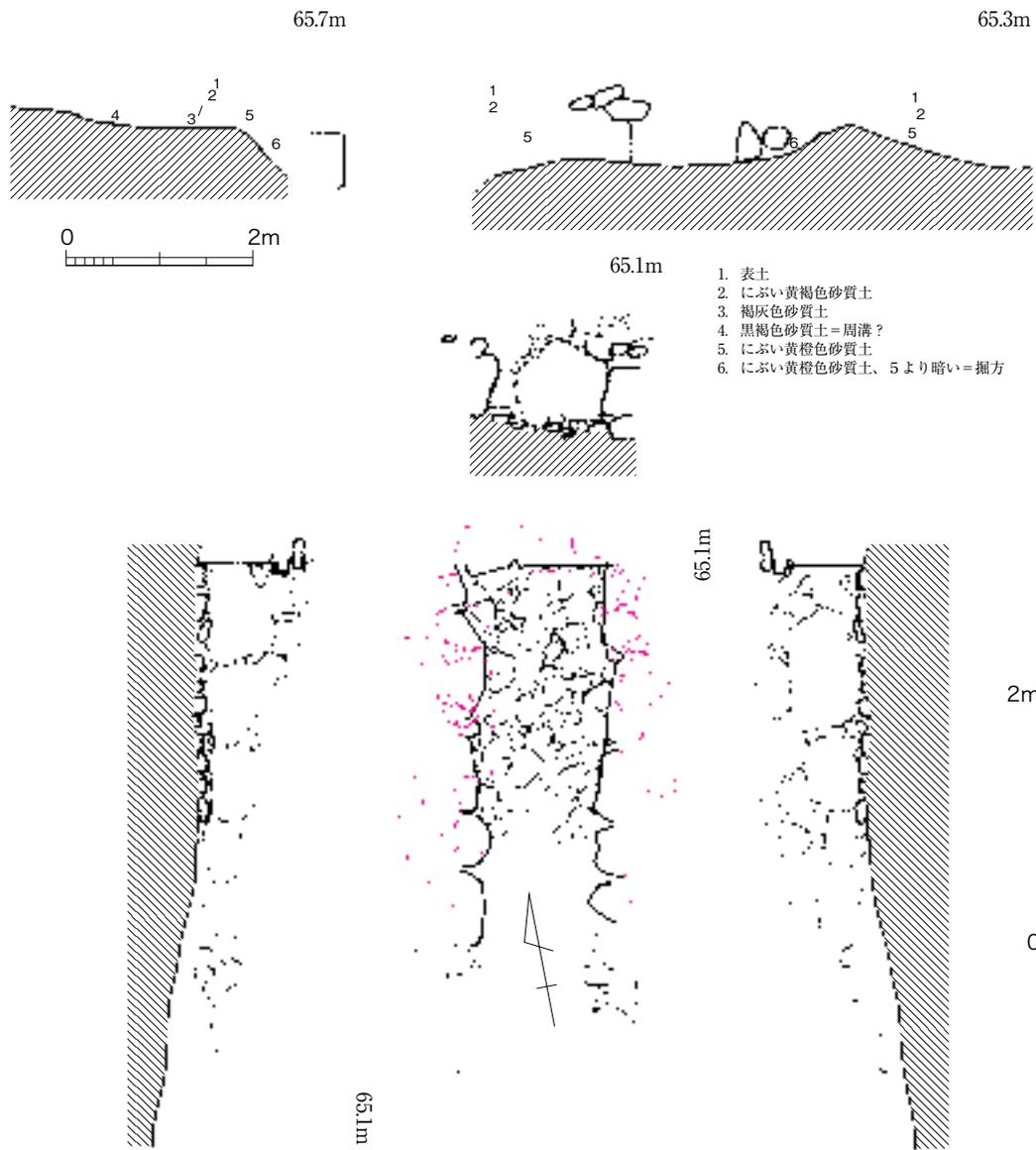
石室と羨道・墓道の区別が明らかでないが、大きめの石を 3 石並べているところまでが石室とすれば、羨道・墓道は共に合わせて長さ 2m、幅 0.8m ほどと考えられる。側壁は径 0.4m ほどの石が乱雑に積まれる。敷石は残存していない。

#### 石室

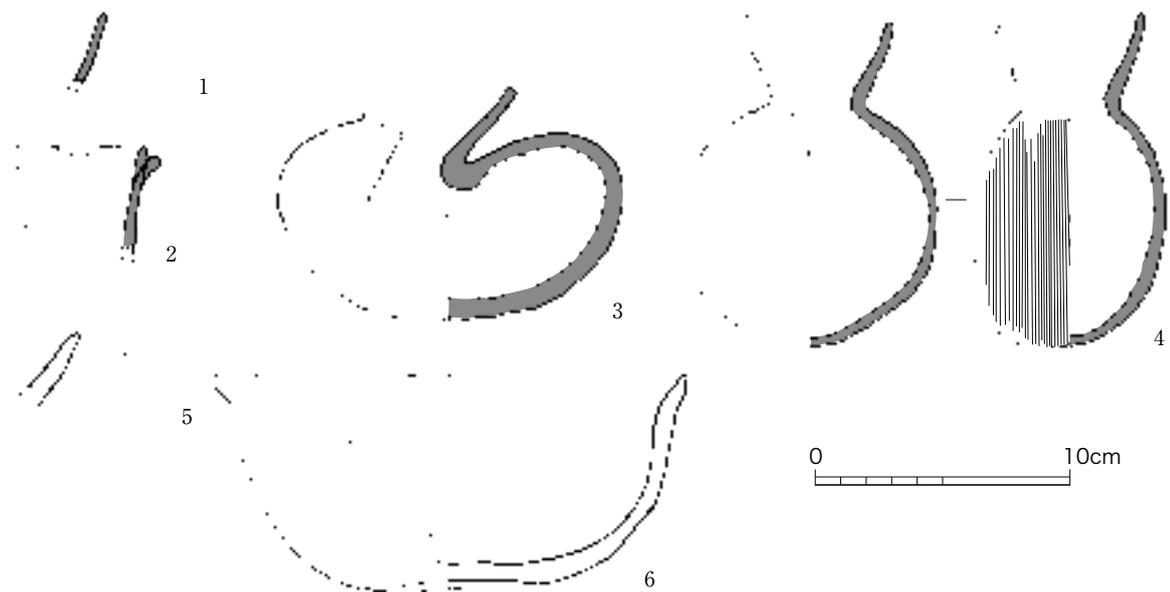
規模は長さ 1.6m、幅 1m を測り、天井部が残っていないため高さは 0.8m 以上である。小型で単室の横穴式石室である。

奥壁は 0.8 × 0.6m の石を立て、その上部に小型の礫を積み重ねる。側壁は 0.7 ~ 1.0m、高さ 0.4 ~ 0.6m ほどの石を基底石としその上部に礫を積み重ねる。以上のことから、高さは 1m 程度であったと考えられる。

玄門は不明であるが、先に述べたように側壁の 3 石までが石室とすれば幅 0.8m である。また、



第36図 17号墳墳丘・主体部実測図 (1/80、1/60)



第37図 17号墳出土土器実測図 (1/3)

その場合 0.4m ほどの横位に置かれた石が框石を意図しているものと思われる。敷石は全体に径 0.1 ~ 0.3m ほどの礫が敷き詰められている。石材は全て花崗岩を用いる。

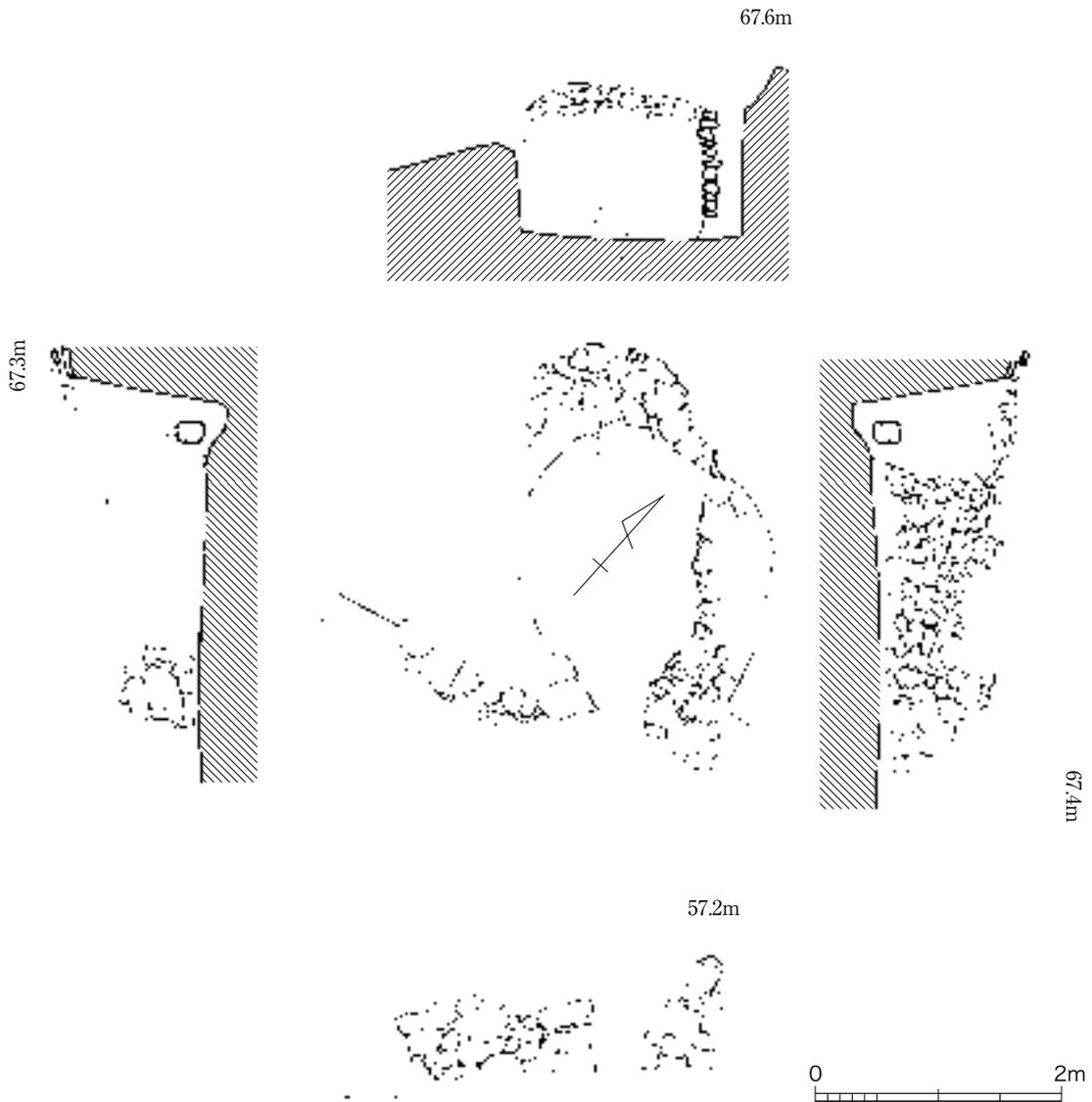
#### 出土土器 (図版 17、第 37 図)

##### 須恵器 (1 ~ 4)

1 は須恵器碗の口縁部片である。やや開き気味に直線的に伸びている。内外面横ナデ調整。  
2 は提瓶等の口縁部だろう。小片であるため傾きに不安が残るが、直立気味に開く口縁部として図示した。片口を作り出しているように見えるが焼け歪みによるものと思われる。

3 は完形の平瓶である。大きく焼け歪んでおり肩部が陥没したような形状である。口縁部はあまり開かず伸びており、体部は丸みを帯びた形状である。体部上半に横方向のカキ目施文、下半部はヘラケズリを行っている。口径 6.0cm、器高 11.8cm。

4 は小型の提瓶である。完形品。口縁部は内湾気味にあまり開かず立ち上がり、外面には一条の沈線を巡らせる。体部にはカキ目施文を行っている。口径 5.9cm、器高 13.2cm。



第 38 図 炭窯実測図 (1/60)

## 土師器 (5・6)

5は土師器碗である。口縁部付近は器壁が薄い。体部はやや厚い。内面縦方向、外面横方向のヘラミガキを行う。

6は土師器鉢である。底部は平底気味で、稜をなさずに体部へと移行している。体部上半はあまり開かずに立ち上がり、口縁部は短くわずかに外反する。口縁端部は外側が面をなす。口縁部は内外面横ナデ、体部は内面ナデ、外面は縦ハケ目調整を行っている。口径 18.4cm、器高 8.3cm。

## 炭窯

### 1号炭窯 (図版 14、第 38 図)

調査区の中央に位置する炭窯である。13号墳墳丘に切り込んだ状態で検出された。

規模は最終形態で 2.0 × 1.4m を測り、幅部分が最大で 1.7m になる。東側壁面のみ補修痕跡が残り、径 0.1m の凝灰岩系の礫を貼り付けて壁面とする。

前面には径 0.2 ～ 0.5m ほどの礫を貼り付けて補強しており、左側は 1.6m、右側は 0.5m の範囲で認められる。煙道は幅 0.2m、高さ 1.3m を測り、入口部分では 0.2m 下に掘り込まれる。土管破片が出土したことから、土管が埋められていたものと考えられる。

煙道出口付近には径 0.2m ほどの礫が敷き詰められる。

時期が判明する遺物はないものの、付近住民の話では昭和初期頃までは炭窯が山中で使われていたそうであり、その時期に近いものと考えられる。

出土遺物はなかった。

## 3) 小結

今回の山口古墳群の発掘調査では、山口古墳群中の 6 基の発掘調査を実施した。

11号墳は、尾根線の先端に近い比較的良好な場所に立地する。玄室の奥壁に巨大な一枚岩を置き、左右側壁にも巨岩を使用しており、時期的に降る要素を有している。石室構造も複室だが玄室と羨道部とが同じ幅で構築されており、また玄室と前室の天井部の高さもほとんど変わらない。床面にも框石を置かず仕切りの無い構造である。断面土層図を観察すると、石室腰石にあわせて墓壙を掘削し、側壁の高さにまで裏込めを行った後で天井石を架構し、そののちに墳丘盛土を被覆したことが理解できる。

12号墳は、11号墳の北側で、尾根線上から少し外れた位置にある。やはり玄室奥壁や左右側壁には巨岩を用いている。石室構造は片袖式であることが特徴で、玄室と羨道部との間には框石を置いて仕切りを意識しているが、玄室幅と羨道部幅はほとんど変わらず、天井部の高さもほぼ同じ高さで構築される。袖石は天井部にまで達しておらず、仕切りとしての機能はうかがえるが天井部の支えとしての機能は果たしていないようである。単室構造だが羨道部は長く、側壁にも巨大な石を用いており前室のような使われ方がされたようにも思われる。閉塞は礫を用いており板石ではない。墓壙はやはり腰石の高さにあわせて掘削され、天井石架構後に墳丘盛土を行った様子が見て取れる。

13号墳は、尾根線上の良好な位置に立地している。石室は奥壁、側壁共に巨岩を使用する。袖石の所に立石を用いているが、石室を囲う意図が無く側壁に埋没したような状況のため、無袖と称して良い状況である。床面は平坦で框石も置かれていない。天井部もほぼ水平に構築されている。

14号墳は、13号墳と15号墳に挟まれた位置に立地しており、立地上、必ずしも適した場所という訳ではない。石室の構築には一枚岩を使用するが、石室規模は長さ1.5m未満、幅1m程度の小規模な石室である。閉塞は二度行っている様子が観察できた。

15号墳は、尾根線上に立地し、やはり小型の部類に属する石室である。無袖に近い構造だがわずかに袖を意識した構造で、玄室と羨道部との境も仕切りを意識したように見える。

17号墳は、稜線上に位置しており、11号墳と13号墳の間にある小規模な石室である。玄室と羨道部との境がなく無袖と称して良い形状である。奥壁や奥壁近くの側壁には比較的大きめの岩が使用される。

これら6基の古墳の築造順序を推定すると、まず立地上も好条件の場所に占地し、構造的にも比較的古い傾向のある11号墳や13号墳が先行して築造され、その次に片袖式の12号墳が位置付けられる。15号墳は小型の石室だが袖を意識した形状から12号墳に後続する時期に位置付けられ、次いで小型無袖の14号墳が13・15号墳の間に置かれる。11号墳と13号墳の間に立地する小型無袖の17号墳が時期的に最も後出する時期に位置付けられる。したがって、築造の順序は11・13号→12号→15号→14号→17号となり、石室構造上、11・13号墳は6世紀末～7世紀初頭、12・15号墳は11・13号墳にやや後続する時期、14号墳は7世紀第3四半期頃、17号墳は7世紀末～8世紀初頭頃に置くことができるだろう。

出土遺物を見ると、11号墳の墓道からは比較的多数の須恵器が出土している。大半が7世紀第3四半期に置かれるものであり、追葬の時期を示している。中世青磁の複数点出土は、古墳の再利用を示したものと理解される。12号墳では6世紀末～7世紀第3四半期の遺物が出土している。11号墳出土遺物より古相の坏等が複数見られるが、これは11号墳では皆無だった初葬時の遺物であると思われ、石室構築の時期が11号墳よりも遡ることを示すものではない。13号墳では6世紀末～7世紀初頭頃の須恵器が出土しており、初葬の時期を示す遺物として理解される。14号墳から出土した第31図1・2の須恵器坏は、北九州市小倉南区から京都郡域の一带を中心に分布する特徴的な器形の坏である。17号墳出土品には坏等は含まれていなかったが、小型化・省略化が進んだ平瓶や提瓶は時期的に後出し、石室の時期とも矛盾しない。

## V おわりに

以上で、法正寺遺跡群第2次と山口古墳群の発掘調査報告を終える。調査内容の具体的成果については先述したので、ここでは遺跡の時期的変遷を中心に周辺の発掘調査成果も含めて概観する。

法正寺遺跡群第2次調査区の近隣には、昭和60・61年に発掘調査が行われた、黒添・宮の下遺跡、黒添赤城遺跡、木ノ坪遺跡や黒ミタ遺跡がある。黒添・宮ノ下遺跡では弥生時代前期後半の円形袋状貯蔵穴が複数検出されており、今回の調査区で検出した1号土坑とも共通する。平地部に立地する木ノ坪遺跡では同時期の円形竪穴建物跡が検出されており、さらに、山口古墳群が位置する丘陵の裾部で平成3年度に発掘調査が実施された山口遺跡でも弥生時代前期末～中期初頭の円形貯蔵穴や円形竪穴建物跡が複数検出されている。この一帯に弥生時代前期後半の集落跡が広く分布すると見てよいだろう。木ノ坪遺跡や黒添・赤木遺跡では古墳時代前・中期の竪穴建物跡が検出されているが、黒添・宮の下遺跡や今回の調査区など丘陵上に立地する遺跡では確認されていない。これもまた、時期によって集落の立地条件が異なっていることを示唆しているものと思われる。

黒添・赤木遺跡では8世紀後半～9世紀前半頃の竪穴建物跡が確認されている。この時期は竪穴建物から掘立柱建物へと居住形態が移行する竪穴建物跡の終焉の時期であり、検出数も少ない。竪穴建物跡の構造的特徴に加えて、出土土器に大きな特徴がある点でも重要である。東日本系統の外來土器とされた、底部平底で内外面にナデ調整を行う甕と、「企救型甕」と呼ばれる下膨れの甕が複数個体出土しており以前から注目されてきたが、今回の調査区でも同様の器形の企救型甕が検出された。

古墳に関しては、昭和59・60年に発掘調査が実施された山口南古墳群、平成8年の倉谷古墳群が近隣の発掘調査事例として挙げられる。

山口南古墳群1号墳は、奥壁は一枚岩を使用し側壁腰石に巨岩を用いている。片袖造りは今回調査を実施した山口古墳群12号墳に共通するが、複室となる点や羨道部幅が狭くなる点については異なっており、山口古墳群12号墳より前出する要素である。山口南古墳群2号墳も巨岩を用いた複室構造である点は1号墳と共通し、両袖となる点で異なる。構造上は1号墳に後出し、山口古墳群11・13号墳より前に位置づけられる。倉谷古墳群1・2号墳は恐らく無袖の小石室であり、山口古墳群14・15・17号墳に類似するものと思われる。倉谷3号墳も袖石を構築するが羨道部がほとんどない小規模化した石室であり、構造上は山口古墳群12号墳の後、15号墳の前に位置づけられるだろう。倉谷4号墳は羨道部まで含めると6m強を測るが玄室自体は1.5m程で、袖石は左袖石だけが意識して置かれるものの、天井部まで達しておらず、また玄室と前室、羨道部の幅もほぼ変化がない。山口古墳群12号墳と共通する構造上の要素を備えており、時期的にも同時期とみて良い。

なお、倉谷古墳群の南側平地部で平成6年に調査された大鎧遺跡では、6世紀末～7世紀初頭頃の竪穴建物群が検出されている。倉谷古墳群とは時期差があるので直接的な関連は認められず、むしろ大鎧遺跡の後背に位置する山口南古墳群が時期的にも近接しており、直接的な造墓関係にあるとみて良いだろう。

現在までのところ、法正寺遺跡群や山口古墳群の発掘調査の成果は断片的だが、前述のとおりそれぞれ特徴的な所見を得ることができた。平地部では弥生・古墳時代から古代、山裾部では後期・終末期の群集墳が広がっており、それぞれ特徴的な要素を備えていることを強調してまとめとする。

# 図 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうしょうじいせきぐんだいにじ やまぐちこふんぐん							
書 名	法正寺遺跡群第2次・山口古墳群							
副 書 名	主要地方道苅田採銅所線関係埋蔵文化財調査報告							
巻 次	2							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第283集							
編著者名	吉田東明・城門義廣							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 TEL 0942-75-9575							
発行年月日	令和5(2023)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃		m <sup>2</sup>	
法正寺遺跡群第2次	福岡県京都郡苅田町 大字法正寺 352-1、372番地	406210	B-115	33° 45′ 5″	130° 55′ 31″	20061005～ 20061023	650	道路改良
山口古墳群	福岡県京都郡苅田町 大字山口 1550、1551、1552-3、 1556-2、1557-2番地	406210	A-307 (県) 900103 ～900114	33° 45′ 51″	130° 56′ 3″	20101224～ 20110331 20110517～ 20110908 20140922～ 20141016	6.750	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法正寺遺跡群第2次	集落跡	弥生 古代 中世	土坑(貯蔵穴) ピット	弥生土器 須恵器・土師器 磁器 鉄器・石器・土製品				
山口古墳群	古墳	古墳	古墳・炭窯	須恵器・土師器 鉄器				
概 要								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 4	登録番号 5

## 法正寺遺跡群第2次 山口古墳群

福岡県京都郡苅田町所在遺跡の調査  
福岡県文化財調査報告書第283集

令和5年3月31日

発行 九州歴史資料館  
〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 株式会社アカマ印刷  
〒810-0014 福岡県福岡市中央区平尾 5-20-3